
山口さんちのクリスマス君

Korat

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

山口さんちのクリスマス君

【Nコード】

N3590V

【作者名】

K o r a t

【あらすじ】

クリスマス君は、花も恥らう13歳の乙女。

だが、何故 彼が君付けで呼ばれているのかと言うと、生まれて直ぐに生死の境を三日間彷徨ったクリスマス。

そのクリスマスの母親が神のお告げで、男として育てれば赤子の身の上に降りかかる災難が訪れる事なく、平和に寿命を全う出来るであろう。

父親は、しがらないサラリーマン。母親は専業主婦を傍に色々と主婦同士で忙しくやっている。

クリスの6歳年下の妹のマリア。こいつを養女にした所から色々な事に巻き込まれて行く。全ては、この墮天使のイタズラから始まったのだった。

コメディータッチ&時々シリアスです。

プロローグ（改&付け足し）

登場人物の紹介です。

山口 クリス 本名はクリストファー。 とされてますが、本当は、
です。

指輪を嵌めている時は、男になっているが、外してしまえば、本来
の女らしい体つきになる。

だが、指輪を外したのは、過去に一度だけ。それは、母さんの願
いもあつたしね。

山口 マリア

元天使と言う墮天使。

俺を男にした張本人だ。天界で赤ん坊の俺の魂を三日間離さなかつ
た為に、こんな事になってしまった。イタズラの天才と俺は思っ
ている。

クリス達が海外に住んでいた時に、屋敷の前に捨てられていたのを
クリスに拾われた。

山口 美和子（イールメークト夫人）

俺の母親。そしてこの指輪を俺の中指に嵌めさせた張本人。

何でも、俺が産まれた時には仮死状態で生まれ、三日間意識不明
の状態だったそうだ。神のお告げだと言って、俺を男として育て
来た母さん。

愛情表現が激しいのがたまにキズの肝っ玉母さんだ。

山口 ケイン（イールメークト宰相）

俺の父さん。しがない普通のサラリーマン。婿養子である。

ケビン ラブバトリー

クリスの爺さん。日系二世の空手選手。空手世界大会の連続覇者であり、クリスの師匠。

女の子のクリスに武道を叩き込んだ人。

学校での友達

河合 章依 (かわいい しょうい)

俺の隣の席にいるヤツ。変わってる男だ。

いつも一人でいるのが好きな男だ。群れているのが嫌いらしい。マリアの初恋の男だ。

俺の事をいつも、睨んでいる。

東 倫理 (あずま とみち)

俺の学校の先輩で、今年中三である。

東先輩は、東病院の院長の跡取り息子。女をナンパするのが生き甲斐。

中等部の生徒会長である。女にモテそうな顔をしているクリスに白羽の矢を立てた張本人。

聴診器を持ち歩くのがクセ。所属クラブはテニス部。

藤 ? (ふじ しゅういち)

俺の学校の中等部の先輩で今年中三である。

いつも顔には笑みを見せているが、腕っ節は強く一度だけ、クリスが女装して外に出た時に、クリスの事を助けてくれた。その時に、クリス「クリスだと知ってしまった。テニス部所属。今は引退している。なので、帰宅部となっている。

東條 敬 (とうじょう たかし)

俺の学校の中等部の先輩で、俺の一学年上の中二である。

キリリとした眉の持ち主で、色黒な先輩。

クリスに抱きつく先輩の一人でもある。先輩の恋を成就させる為に肌脱ぐが……。

所属は、空手部とテニス部の掛け持ち。

新入生だったクリスを呼び出した張本人である。

理由は、「空手部に入れさせるため」と女にモテそうだからだ。

竜崎 健次郎（りゅうざき けんじろう）

クリスの学校の先輩で中三である。

女の噂を全く聞かない俺の事を心配している人。一度、街で俺が女装した時に、ぶつかった相手であり、その時に本人曰く「恋に落ちた」と言っている。

クリスの憧れの先輩である。クリスに抱きつくとクリスの反応を見て喜んでいる一人。

クリス君の事情 ？

「クリス〜！入るわよ。そろそろ寝ないと明日から学校でしょ？ 新学期早々、遅刻しちゃうわよ。」

母さんが畳んだ俺の洗濯物を持って、俺の部屋へとやって来た。別に、ノックはしなくても、母さんはいつも俺の部屋に入る前には、必ず一声かけて来る。

俺はベッドに寝転んだまま怠そうに、天井のシーリングファンを眺めていた。そんな俺の額を母さんの冷たい手が、乗せられる。

「少し熱があるわね。今夜は、体を冷やさない様にTシャツを着て寝るのよ。クリスは明日の朝のご飯は、和食？それとも、パパと同じトーストにスクランブルエッグとベーコンどっちにするの？」

大きく伸びをすると、俺は片目を瞑り一言。

「パパと同じ。」

母さんは、俺の答えを知っているくせに毎回聞いて来る。けどいつも、母さんは にっこり微笑むといつもと同じ事を言ってくる。

「なら、明日の朝は、三人で朝食の争奪戦だから・・・」

俺は気だるそうな顔をして、「早く起きること」「母さんとハモった。」

そう俺には6才年下の妹がいる。コイツが生意気なんだ。まるで自分が母親にでも、なったかのように、俺に色々と指図をしてくる。

俺は、眉間に皺を寄せると嫌そうな顔をして見せた。母さんは、それを見てクスツと笑うと俺の頭に手を置いて、前髪をくしゃくしゃになるくらいに軽く撫でて来た。

「女の子がそんな顔をしないの。」

女の子。そう、それが俺の性別だ。しかし俺が通っているのは中高一貫の男子校。どうして俺が男子校に通っているのかって言うところ。。。

これもふざけたような理由からだった。

だがこの理由を母さんが俺に話す時は、決まって母さんはとても真剣な面持ちで話して来る。

あ、自己紹介が遅れました。俺、クリス13歳の乙女座。性別は女。しかし俺が通っているのは、中高一貫の男子校に通っている。何が悲しくて女なのに男子校に通わなきゃいけないようになったかと言うと、よくアニメやドラマにあるような感じの別に好きな男の為じゃない！何でも、俺が生まれた時、赤ん坊だった俺は、三日の間 昏睡状態で父親でさえも「諦めた方が良い」と母親を諭した程だった。だが俺の母親は、周りの説得には応じず、ただ気が狂ったように夫である俺のパパに食って掛かって来たそうだ。

「この子は、必ず生きれます！だって今朝 神様が私の枕元に立たれて、私にお告げを下さったんです！『娘を息子として育てるなら生きれる』と言われたんです。だから、この子は息子として育てます！」

その時の母さんの物凄い剣幕にパパも押されてしまい、母さんの好きにさせれば気が済むだろうと思っただろうな。

それで俺は男として戸籍にも登録された。小学校卒業時までは、海

外に居たから別に俺自身何も自分の性別に関して何も違和感が無かった。

海外の学校では水泳の授業なんてなかったから……。
親の仕事の都合で日本に連れ戻された俺は、普通の共学の学校よりも男子校へと有無を言わさず入れられた。

帰国子女と言う事と、俺の足が速いと言う事で、俺は直ぐさまリレ一の選手に抜擢されたが、ここの学校もイケメンが勢揃いだった。

(海外の学校もイケメンや美人が多かったからな。)

特に俺の隣の河合 章依は、ぶっ切ら坊ではあるが コイツが笑ったら、他の女共は黄色い声でキヤーキヤー騒ぐんだろうな…….
思うと俺の胸がずきんと痛む。

河合 章依は、身長が185くらいあるのかな……. 背が高い。肩幅も広そうだ。

流れるようなサラサラヘアの黒髪に、少し不似合いのピアスがたまに光って見えている。

ヤツの綺麗な柳眉は、まるで女みたいに弧を描くように繊細だ。瞳は黒く、俺を見る時にいつも剣を差したような陰険な目をしているが、切れ長の大きな瞳をしている。

よく授業中に隣で、河合が居眠りをしているのを見ると、睫毛が長い。マスカラとかエクステとか使っているのか?!と思うほどビッシリと生え揃った睫毛は、クルンと上を向いている。世の女共から見れば、羨ましい限りだ。

そうそう、この河合の事を好きなヤツは、俺の家に居たな…….

口うるさい俺の妹。妹と言っても俺とは血は繋がっていない。ただ、海外に居た時、俺の家の前に大きな籠が置かれていたんだ。

その籠の中に入っていたのが妹ってわけ。

コイツが七面倒臭い程、やたら吠える!命令する。

そして、俺は知ったのだ。コイツが俺の秘密の元凶だって事を!

俺がこの世に生まれ落ちて三日の間、生死を彷徨った時、コイツは天界に居て暇つぶしに、これから生まれ落ちるであろう子供（って俺の事だよ。）の魂を捕まえて遊んでいたのだ。

そうコイツの正体は天使。だが、その事が神様にバレて、（そりゃあ、バレるわな）神様は昏睡状態に陥った俺を救ってくれる為に、一芝居を売ったって訳。

そんで神様から罰として、俺の側で俺の行く末を見守るようにと落とされたのが、コイツ．．．俺の妹って事だ。

妹の顔？さあ？可愛いのか？

色白で茶色の目をしているが、お目目はパツチリ。

イタズラ好きだと言わんばかりのクルクルとしたコロネの縦巻ロールに似合っているんだろうな。

俺の学校の男共が騒いでいる位だ。スタイルも悪くは無い方だろうが、胸は．．．俺の方があるだろう．．．。何しろ相手は小学一年だしな。

それが悔しいのか、いつもコイツは俺の胸囲を目の敵にしている。

はん？一体誰の所為でこんな目に合っているってんだよ！それが俺達兄妹ケンカの原因だ。

一度口論が始まったら、母親が止めに入るまで、俺達2人のケンカは終わらない。

元々俺は、祖父が空手の道場を経営していたと言う事もあって、空手は幼い頃からやらされていた。

中学に入って以来、祖父が他界したから道場も潰れてしまったが．．．それまでの間、毎日修行に明け暮れていた。この俺の祖父は日系二世だ。何でも生前は、空手の世界選手権を何度も制覇した強者だったらしい。

俺は、その爺さんに毎日扱かれていた所為もあって、その変のゴロツキに絡まれても、逃げるフリをして相手の急所目掛けて蹴りを入れて逃げられるようになった。これは、俺の爺さんに感謝しておかな

いとな。合掌！

ケンカは、こつちが手出しをすれば妹に大けがを負わせるのは眼に見えてる。だから、そう成る前にいつも母親が止めに入る。

俺の妹の名は、マリア。

何でイタズラばかりして天界から落とされたコイツが、聖母マリア様と同じマリアなんだよ。ルシエファーで良かっただろ！地獄に堕ちた墮天使！良いじゃねーか。

俺は、一度こいつが鏡を使って神様と交信しているのを知った。その時に、鏡の中から人の声が聞こえたんだ。そしてその声は、マリアに「良いか、マリア。お前の使命はお前がイタズラ半分で天界に三日も引き止めていたクリスを幸せに導く事だ。これ以上、クリスを不幸にすれば、お前の天界への出入りを厳禁するぞ！」そう言っていた。

鏡は、常に光りながらマリアにお小言を言っている。俺とケンカした後は、必ずマリアの鏡がマリアを呼んでいる。

それを見てみると「また、神様から怒られているんだ……。」
そう思えば、ケンカでムシヤクシヤしていても、少しは気が晴れている。

何しろ、マリアはその後目が真っ赤になっているからだ。

それでいつも怒られるのは俺だけどさ……。神様……。やっぱり俺って、不幸だよ。

どうして、マリアなんかを俺の元へ寄越したんですか？

クリスマス君の事情 ？（後書き）

思いつきで書いてみました。

コメディー・タツチ&mp・シリアスを掻き混ぜたお好み焼きのようですが、読んでください。

此処は、読み難い！分かり辛いなどありましたら、教えて下さい。

クリス君の事情？

恨むような思いで空を見上げると、俺はいつも溜息をついてしまう。俺は、毎朝こんな思いで学校へと通わなくてはならないのにさ。．．．。いつかは、女に戻れるのか？でも、それで俺を好きになつてくれるヤツはいるのか？そんな思いが毎日俺の頭の中で自問自答のようにグルグル回っている。

学校に着けば、東先輩からいつもの様に「よう〜！クリス〜！今日の放課後は、俺に付き合え！」抱きつきながら言い寄る東先輩の顔を蹴りで躲すのが日課になってしまった。東先輩・名前は東倫理^{みち}だけど、他の人達は倫理先輩と呼んでいる。

今朝も俺の機嫌が悪いにも関わらず、俺に毎朝同じ事を言ってくる東先輩。俺は、足で蹴りを決めた後、先輩に毎度の如く先輩の誘いを断る俺は、いつもと同じ朝の言葉を言う。

「嫌です。先輩は俺を使って、また女子高生をナンパさせる気ですよ？嫌だ！断ります！」

そう、俺、山口クリス（本名はクリストファーだが、皆俺をクリスと呼んでいる。）は、日系人の祖父と同じ金茶の明るい色の髪をしている。

ピアスは開けてないが、指輪は嵌めている。

何でも、この指輪は母親が言うには（お前が三日三晩、意識が無かった時にもうダメかと思ったら、神様がお前に託してくれたのよ！これを嵌めていれば、体も男としていられるんですって。だから、女とバレる事はないそうよ。）と言う事で、左手の中指に黒い指輪を嵌めている。

一度だけ、この指輪を外して街に買い物に行った時があったが、其

れはまた別の機会に思い出す事にして。

この学校の中等部に入って来た時は、中等部の先輩から一目目にして呼び出しを食らった。

理由は、オンナにモテそうだからと言うくだらない理由だった。

殴られる前に俺が全員をボコボコにしまったお陰で、俺は入学早々大変な目に遭ったと言う訳だ。

その後でまた別のグループに呼び出しを食らった。

しかもその時は、この学校の生徒会長で、昨日俺が呼び出しを食らったグループのリーダーとか．．．だった人が、俺にさつき蹴りを入れられて地面に倒れた東先輩と言う訳だ。

東先輩は、自分の手下達がいきなり俺を呼び出して、因縁吹っかける前に、俺に寄ってボコボコにされた事を言ってきた。

何故か、俺は東先輩に気に入られて、ナンパする時には、いつも俺を捕まえてオンナをナンパさせる。

東先輩だって、十分過ぎるほど、整った顔立ちをしているのに、何故 俺を使う？

この先輩は、少し長い前髪をサラツと手で掻き分けるのが好きなナルシ。

しかもこの先輩自身、モテる。細面の顔は色白で目は切れ長で大きな瞳をしていて、眉はキリリとした男らしい眉だ。でも剃っているんだろぅな．．．。でないとおそこまで綺麗なキリリとした眉は、自然に出来ないだろう。唇は赤くプリツとしているが、タラコではない。女から見ればキスが上手そう〜って思うほどなんだろうな．．．。

来年度から隣の校舎で高校生となる東先輩は、俺のアドバイスをしてくれる面白い先輩だ。でも、そのアドバイスって、全く役に立たないんですけど〜！

「秘技！女を落とすコツ！」

そんなん要りません！

クリス君の事情？

結局 その日の放課後 俺は、東先輩に連れられると有無を言わさず、グイッと俺の襟首を掴んで半ば引きずる様に駅前まで連れられて来た。

やっぱり．．．とガツクリしている俺の顔を他所に、ここに居るのは、満悦の笑みを見せている東先輩だけじゃなくて、藤先輩に東條先輩、健次郎先輩もいる。

この健次郎先輩は、俺に取って憧れの健次郎先輩だ。だが、先輩の名字は、「竜崎」と言うが俺の発音では「竜」と言う発音が難しく何度先輩の名字を言う練習をしても、「デー崎先輩」としか発音が出来なかった。

帰国子女の俺に取って、この先輩の名字を言うのが言いにくかったと言う事もあり、健次郎先輩直々に「面倒くさいから、下の名前で呼んで良いぞ」と言って来てくれたので健次郎先輩と呼んでいる。嫌な予感がして来て、恐る恐る先輩達に聞いてみる俺。

「先輩方、部活は？あ．．．俺は帰宅部だから、別にどうでも良いですが。じゃ．．．って事で帰らせて頂きます。ちーっす！」

俺が、当たり障り無くニコニコ顔の先輩達を前に、自分の家に向って帰ろうとした途端、健次郎先輩が後から俺に抱きついて来た。

耳まで真っ赤になる俺の反応が面白いらしく、先輩方にこうして俺は、毎日マスコット状態に遭っている。

「せ、先輩．．．部活は？」

俺の心臓は、胸骨から飛び出して来そうになった。まるで、全身が心臓状態。

マジにそんなんだったら、もう死んでるが。自分の早鐘の心臓の音が先輩に聞こえない様に、落ち着こうとしても一向に心臓の音は、新幹線と同じマックスでドドドドド　と言ってる。

そう先輩方は、テニス部だが、どうやら　もう引退してしまったらしく、女の噂の一つも聞かない俺の世話を焼いているらしい。（余計なお世話だつて）

俺は、いつも健次郎先輩に頭を撫でられると毎回胸がドキッとしてしまう。そんな俺の反応がみたらしく、東先輩はいつも健次郎先輩を俺の前に連れて来るのだ。

「あの〜東先輩〜。俺の心臓で遊んでませんか？」

東病院の院長の息子であり、医学部志望の東先輩は、いつも聴診器を持ち歩いている。それで俺の心臓の音を聞いて楽しんでいるのだ。

（いい加減にしてくれ〜）

クリス君の事情 ？

東病院の院長の息子であり、医学部志望の東先輩は、いつも聴診器を持ち歩いている。それで俺の心臓の音を聞いて楽しんでいるのだ。
(いい加減にしてくれ)

今日は、俺に用事があるのは健次郎先輩らしく、いつもよりも俺に長く抱きついていて。俺は、いつも成されるが俣々になっている。下手に抵抗すると、もっと面白がられるのが分かっているからな。健次郎先輩が俺の顔をじつと見つめて来ると、心臓が爆発寸前！

「クリス。お前、双児の妹とか居るのか？」

「居ませんよ。」

「だよな」

「へ？何ですか？妹なら、先輩も知ってるマリアですけど．．．。だけど、あいつは、まだ小学生１年生ですよ。何ですか？ それとも、先輩って．．．。ロリコンですか？」

俺の爆弾発言に東先輩からの鉄拳が、俺の後頭部に飛んで来た。俺が涙眼で頭を撫でていると、健次郎先輩の大きな手がナデナデとしてくれている。

どうやら、健次郎先輩は、好きな女がいるらしく、その女の事が忘れられないらしい。そして、その女が俺にソックリだと言って来た。だから俺にいつも抱きついて来るんですね．．．。俺のガラスの心は、砕け散っちゃいましたよ．．．。

あ．．．。のっけから俺はフラレタンですか．．．。健次郎先輩に肩を抱かれると俺は、つい赤面してしまう。下を向いている俺を面

白そうにからかう東先輩達。

「あ、あの俺の反応で遊ばないでくれますか？．．．で？一体今日はどの子をナンパすれば良いんですか？」

早く帰りたいたいが為に溜息まじりで俺がそう口走ると、健次郎先輩がポツリと言った。始め、俺には聞こえなかった。先輩が何を言おうとしているのかなんて、分かりたくも無かった。だって、俺．．．先輩が好きなんですよ！

「女装してくれ！」

「はぁ？」

いきなりの健次郎先輩からのお願いで、俺は東先輩の家に連れて行かれた。東先輩には俺と同じ年の妹が居るらしく、服を貸してもらえと言われた。何でも先輩の言い分からすると、俺とよく似た顔をした女の子と街でぶつかった時に、その女の子から「ご、ごめんなさい。健次郎先輩」って言われたんだそうだった。

その事を聞いて、俺の頭の中は真っ白となった。

そ、そう言えば．．．。一ヶ月前に俺の大好物のケーキを食べに行きたいばかりに、俺はつい誘惑に負けて、左手中指の指輪を外しちまったんだっけ．．．。その時、慌ててケーキ屋に行こうとして．．．。その先はモヤモヤしていて、ケーキを食べた事しか覚えていなかった。まさか、健次郎先輩にぶつかっていたなんて思いも寄らなかった。

東先輩の妹は、美幸と言うが、俺の顔を見て赤くなっていた。

彼女から、見立ててもらったワンピースを差し出されると「これを着てくれ！」と東先輩に言われた。

もちろん、俺は即答で答えたさ。

「遠慮します！」

「健次郎の頼みであつてもか？！」

「え？」

俺は、健次郎先輩の顔を見て．．．はあ〜と溜息をついた。何で憧れの先輩の前で女装をしなきゃなんねーんだよ。これもそれも、全部あの墮天使のマリアの所為だ！アイツが俺を三日間もの間、俺を天界に引き止めなければ、こんな事にはならなかったんだぞ！

俺は、健次郎先輩を見て、妹のマリアがよくやる戦法を使った。上目遣いで甘える様に健次郎先輩に聞いてみた。

「あのお、俺、汗 掻いてるし、今度日を改めて〜女装するって事で良いっすか？」

なのに、東先輩が「却下！」と言ってきやがった。己〜張り倒すぞ！今此処で暴れても、先輩達にまた怪我を負わせる訳には行かないし．．．。と言う事で、渋々俺の女装が決定しました。

クリス君の事情 ？

「あの俺、汗 掻いてるし、今度日を改めて女装するって事で良いっすか？」

なのに、東先輩が「却下！」と言ってきやがった。己張り倒すぞ！今此处で暴れても、先輩達にまた怪我を負わせる訳には行かないし……。と言う事で、渋々俺の女装が決定しました。

だが、一度家に帰ってから来ると言う事で、速攻で帰宅した俺は、汗だくの夏の開襟シャツを脱ぐと、中指から指輪を抜いた。

俺の体の周りから煙が出て来ると、俺の髪が腰まである長くウェーブがかかっていた。

約束した事は必ず守る俺なので、速攻でシャワーを浴びると、丁寧に髪を洗った。

今は、テスト期間だし、授業も3時間で終わるので、下手すると小学生的マリアよりも早く俺は家に帰って来る。

マリアの部屋からキラキラと光が漏れ出していた。

多分、あの「鏡」だ。と言う事で、俺が鏡に出る事にした。すると神様驚いていたぜ。「何で女になってんじゃ〜！」そこで、カクカクシカジカと事の成り行きを話すと、神様も分かってくれたらしく、今回の事は多めに見てくれる事になった。

だが、指輪は無くさない様にと言われ、俺は、指輪を俺が女装する時に使うピアスの箱に入れているのを見せると納得してくれていた。

ピアスは、女装する時についでに開けたんだ。もし、俺とバレたら、俺は普段からピアスなんて嵌めないから「違うよ〜」って言えるしね。一月もピアスを嵌めていないから、ピアスの穴が半分塞がって

いる状態だ。今、無理に開ければ、明日また学校で先輩達にこれが見つかったら、何言われるか分からないからな。と言う事で、ピアスは結局諦めた。

靴も可愛いのを母さんが買っておいしてくれたんだ。

「あんだだつて、年頃の女の子なんだから、一度や二度くらいは男子校の柵を抜けて、女の格好をしてみたい時もあるだろうからね。」
と言う大らかな母親らしい理由だった。

だったら、俺の指輪を取らせてくれ……。そう頼んだら、

「却下！私にクリスを失えって言うの？！そんな事になったら、鴨川で身投げしますからね！」

物凄い剣幕で母さんは俺に、そう言うて来た。それを聞いた親父は、俺に二度と母さんの前で指輪を外して生きたいと言うなと約束させられたんだ。

だがね、ここ関東だけ。鴨川って京都だろ？普通に考えりや分かるだろ！そんなこと母さんがやりっこないってな。

親父も甘いな。

女になった俺は、やはりクリスとして、踵の低いパンプスを履き、鍔の大きい帽子を被って家を出た。先輩が見たって言う一ヶ月前の俺の服装。それを再現してやった。

黒い前開きのシャツに花柄のカラフルなミニスカート。もちろん下には、マイクロミニのスパッツを履いている。結構これが、可愛いらしく歩く度に、足がスースーしてくる。

この服を着ている時に、ふと思いついた事があった。

あれ……。俺がぶつかったのって……。一人じゃなかった筈だ。

健次郎先輩と、その後につかつたのって、誰だろう……。思
い出せない。

ま、良いか。

俺はその時、この思い出せなかった事が、後でどれだけ尾を引く事
になるなんて、その時はこれっぽっちも思いもしなかった。

只単に、早くこの女装を終わらせたかっただけで、俺は焦っていた
のだった。

俺は、健次郎先輩を携帯で呼び出すと、公園へと行った。健次郎先
輩との待ち合わせまで、まだ時間があったからベンチに座って公園
で遊んでいる子供達を眺めていたら、5人の柄の悪い連中に絡まれ
た俺。

「うつひょ〜。上玉だぜ〜！」「ね〜彼女。オレツち達と一緒に遊
ぼうぜ。」

「遠慮致します〜！」

眉間に皺を立てた俺は、キツと奴らを見ると奴らは、此処の市でも
結構悪評の高い高校の生徒達だった。お、女の力で勝てるのか？

クリス君の事情 ? (後書き)

普通だったら、此処で正義の味方が登場するんだけど、どうなるんでしょうか。。

クリス君の危機一髪

俺の返答にも怯む事無く俺の手首を掴んで来た男に、俺は組み手で握り返すと、手首を捻ってやった。次々と男達を倒すと俺は、一息を乱さずまたベンチに座って今度は、本を読み始めた。

スカートを履いているので、今回は踵落としとかの足技が使えないのが悔しい。

まさか、女物の下着を見せる訳にはいかない。それだけは、恥だ。待ち合わせの時間ピッタリに健次郎先輩が、公園にやって来た。

俺が座っているベンチの近くに伸びていた高校生達を見て、「お前がやったのか？クリス．．．相変わらず強くな。」なんて呟いていたけど、俺は先輩を黙って見つめていた。

「本当は、怖かったんだからな．．．。東先輩達は、彼処の茂みからずっと見ているだけだったから、下手に足技は使えなかったし．．．。女が不良に囲まれているのに、助けなかったし．．．。藤先輩とか本当は強いクセに。」

俺の言葉に驚いていた健次郎先輩は、周りを見渡すと東先輩、藤先輩、東條先輩が茂みの中から頭を掻いて出て来た。

3人は、女装した俺を頭の天辺から足の先まで、じい〜つと穴が開くかと思う程、俺の事を見ていた先輩達。

藤先輩は、にっこり天使の微笑みを俺に見せると、俺の髪を一本引き抜いていた。

「ふ〜ん。クリスの女装って、本当の女よりも、良いかもな。安心だし。気を使わなくても良いからね。」

「あ、あの〜それってどう言う事ですか？俺、貞操の危機は嫌ですよ。」

慌ててそう言うと、藤先輩は笑って、俺の側に寄って来た。

藤先輩のキラリと光る切れ長の瞳で俺の秘密を見透かす様に見つめて来た。その藤先輩の笑顔って、妙に艶っぽくって反対に、俺としては怖いんですけど・・・。

それに皆の視線が一点に集中しまくっているような気もしないでもない・・・。

みんな一体何処を見てんだ？

ミニスカか？それとも髪か？

「クリス。変に畏まったりしなくても、クリスとなら自然体で話が出来るって訳だよ。でも、この髪長いね〜。地毛？じゃないだろ。

いつものクリスなら、髪は肩までだよな・・・。」

俺の髪を一房指に絡めると、藤先輩の顔が俺の頭に近づいて来た。

い、息がかかって来るんですけどお〜。

これって、マジで俺を落とそうとしてないか？

端から見れば、イケメン4人に囲まれている俺って、感じに見えるんだろうな。

しかも、俺の顔は真っ赤だ。

いつもはこんな時は、俺の胸に聴診器を当てて来る東先輩も、何故か聴診器を持ったまま固まっていた。俺と目が合つと、すかさず自分の胸に聴診器を当てて、自分の鼓動を聞いたり、後は伸びている不良達の首とか手首とかに、聴診器を当てたりしていた。

「え、エクステです・・・。」

とは一応言ってみたが、本当は地毛です。これをDNA鑑定にでも

出されたら、一発でアウトだぜ．．．。怖いっす！

ヒヤヒヤ物の俺の表情を見て、面白い玩具を見つけたみた子供の様に目をキラキラとさせて俺を見ている藤先輩。

ダメだ．．．。俺．．．絶対に遊ばれている．．．。この藤先輩の笑顔．．．超怖〜！

クリス君の危機一髪（後書き）

沢山の方々にご訪問して頂き、ありがとうございます。

バレてしまったクリスの秘密

健次郎先輩と2人つきりになれるのかと思っていたが、どうやら俺の女装をみたいらしくて、とうとう先輩達全員で俺と健次郎先輩のデートを眺めに來たらしい。

「だったら、さっき俺が不良の高校生達に絡まれていた時に助けてくれなかったのは何ですか？」

俺がジト目で先輩達を見ていたら、東先輩達がお互いに顔を見合わせる苦笑していた。

何を笑っているんだ。特に東條先輩は空手部主将で、去年の大会だって全国制覇をしていたのに……。

ギリリと下唇を噛み締めると、藤先輩がニッコリ微笑みながら、俺の唇を指差している。

ああ、噛み過ぎるなって言う事か……。

いつも俺をマスコット代わりにして遊んでいるこの先輩達は、我ら聖蘭学園のモテる男達トップ4に入っているらしい。この事は、俺の妹であるマリアから聞いた。俺が、いつもこの先輩達と遊んでいる事を知ったマリアは、先輩達に自分を紹介しろと煩かったから、一度だけ我が家に来てもらった時に、マリアを先輩達に紹介した。

マリアのお気に入り先輩は、藤先輩だ。

そう藤先輩は、俺の妹マリアの意中の人なのだ。

あのルシェファアの様な子が……。

その藤先輩って、少し濃い茶髪でウルフカットをしている。この先輩と一緒に歩くと本当に他校の女生徒達からの視線が凄い！

「きゃ〜！藤先輩よ〜！ラッキー！」

いきなり手を握って来る女も居るくらいだ。

藤先輩の特技は、マジック。結構これは様になっているのだ。本当に藤先輩はモテる。俺だけにいつも優しい藤先輩……。そんな藤先輩の優しい瞳が俺をじっと見ている。

「だってさ、俺らお前よりも弱いし。お前ってば此処いらでは、滅法腕が立つからな」

と言う事で俺の武勇伝を見学していたそうです。端から見りゃ、過弱気女の子が、5人の不良達に囲まれていて、助けないってどう言う神経だよ！そんな感じた。

俺が、先輩帯に呆れたのは、東先輩のその後の言葉だった。

「入学式の日、うちの空手部の二年と三年。計10人をたったの20分で倒したのは、クリス。お前だろ。だからさ、あの不良相手に何分で倒せるか賭けてた。」

オイオイ！普通は女の姿をした俺を助けてやろうとは思わないのか？プルプルと俺の肩が震えている。

そして、この賭けに勝ったのは、藤先輩でした。しかも、この飛んでもない賭け事を言い出したのは、なんとあの藤先輩。

普段は、滅茶苦茶と言って良いほど俺にも優しく、他の人にはクールな先輩が……。何で、俺を助けない？

しかも、藤先輩は涼しい顔で言ってくる。藤先輩あなた……。本当は強いでしょ……。俺、知ってんだぜ。なのに、何でこんな事を言ってくるんだ？

「クリスなら、10分もかからないよって宣言したんだ。」

それって、勝つ気満々って言う自信の現れですよ。

俺は、藤先輩達に呆れてしまったよ。

一体何をやってるんだか……。その間、俺の事をじっと眺めている健次郎先輩は、いきなり俺を真正面から抱き締めると何度も俺の体を自分の胸板に押し付けた。

「なあ、クリス。俺の為に女装してくれて、嬉しいんだけどさ……。お前の胸って詰め物でもしてんのか？ 結構、柔らかいけど……」

いきなり言っただけ来た健次郎先輩。

俺の顔が真っ赤になってその後、急に真っ青になって来るのが、自分でも分かった。先輩達の目が点になっているからだ。

「いや！触らないで！」

思わず女言葉になってしまった俺は、先輩達の前でポロポロと泣いてしまった。

俺は漸く空手で不良達と戦った時に、自分の服の胸のボタンが二つ取れてしまっていた事に気がついた。

必死で俺は、今更ながらに胸の前開きボタンが二つほど取れている間から、自分の胸の谷間がブラと一緒に見えて来てるのをさっきから、先輩達が凝視していた事に、漸く分かれると俺は直ぐにその場にしゃがみ込んで胸元を隠していた。

真っ赤になってしまった俺の顔を見て、先輩達が立ちすくんでいる。

もう、ダメだ……。女だとバレちゃった……。よ。

いつものように、笑顔で「あははは〜冗談です。ちーっす！」なんて言う余裕も、今の俺には全く無かった。

俺は、止めどなく流れ落ちる涙を拭いもせずに、走り出した。
ダメだ。

先輩達の思い

俺の言葉に金縛り状態になった健次郎先輩。

そしてにっこりと微笑む藤先輩。

東先輩に至っては、口を鯉の様にパクパクしている。

東條先輩は、大人の貫禄もろ出しで、脱兎の如くその場から逃げ出した俺を追いかけようとした健次郎先輩の肩を掴んで、ポツリと呟いた。

「そつとしておいてやれ。クリスマスだって、好きで俺達を騙していた訳じゃないんだ。アイツから、訳を聞くまではそつとしておいてやる。それに、俺達はクリスマスが男でも女でも、好きなんだからさ。そうだろ？藤、東、健次郎。」

先輩達は、その場に立ち尽くしていた。もうダメだ。絶対に嫌われたいに決まっている！

俺は、今まで先輩達と一緒にいた時間が、いきなり色褪せた思い出に変わって来る。

河合にいつも隣で睨まれているのを笑顔で躲しているのも、もしかして、俺は河合の事も健次郎先輩への思いと同じ様に好きなのかも知れない。

鈍感過ぎるほどの自分の気持ちに、今更ながらに自分で呆れてしま

う。

失ってから、漸く俺は毎日が充実していた事に気がついたのだった。明日は、土日。月曜からどんな顔して先輩達に会えば良いんだよ。

。「ううう。グスン．．．グスン．．．健次郎先輩．．．。東先輩．．．。東條先輩．．．。藤先輩．．．。ゴメン．．．。

。皆．．騙してしまつて、ゴメン．．。」

俺は、公園のアナポコ山と言われる子供達がよく隠れんぼで使っている所に、隠れて泣いていた。此処は、俺が小さい頃 親に怒られた時や、今は天国に行つてしまつた俺の祖父の扱きとも言える空手の修行が辛くて、よく修行の後で隠れて一人で泣いていた場所だつた。

一時間くらいだろうか、俺がアナポコ山の空洞となつている穴の中で、泣きじゃくつていた。一頻り思いつきり泣いた後で、気持ちがつつてして来たのか、俺はアナポコ山からゆつくりと出て来ると先輩達が、俺を待っていてくれた。

「よう。泣き虫クリス。思いつきり泣いて、スッキリしたか？」

東條先輩の優しい笑顔で俺は泣き過ぎて、目が真っ赤になつてしまつた目で先輩達を見た。

まだ胸元のボタンは、取れてしまつているから凝視されたくない．．．
．．．そう思つて、俺は胸元の開きを片手で、ぎゅつと皺が寄るくらいに握りしめる。

そんな俺に藤先輩が側にやつて来て、俺にテニス部のジャージを羽織らせてくれた。

「クリスは、クリスだからな。お前が話してくれるまで、僕達は待っているよ。だけど、今日は僕達とデートだな。他の連中に見つかるといけないから、僕のを羽織つていなよ。」

優しい藤先輩．．．。

そんな藤先輩の手のひらに乗せられた片方のピアス。

あれ．．．？

このピアスつて．．．。

先輩達の思い？

俺のピアスだよな．．．．．。何で藤先輩が持つてんだ？

俺は、不思議な顔で藤先輩の顔を見ていた。そんな俺を見ていた藤先輩は、溜息をつきながらも「本当に覚えてないんだな。」そう言っ
て俺の手にピアスを乗せた。

そっぴゃ．．．このピアス、俺 失したと思っっていたんだが、でも何で藤先輩が俺のピアスを持つてるんだろっ？

俺の驚いている表情を見て、藤先輩は機嫌良く笑っている。

「クリスつてば、考えに没頭していると、百面相するんだな。」

そう言っつと笑っている。

そんな俺をさつきからじつと見ている健次郎先輩。

だけど俺は、気恥ずかしくて、健次郎先輩に抱きつけず俺の事を100%とは行かないが、80%くらい理解してくれている東條先輩の胸に縋って泣き出した。

「あれれ。クリスがまた泣き出した。」

藤先輩の声。含み笑いが言葉の端々に出ている。

「本当によく泣くなあ」

東條先輩が俺の頭をナデナデしながら俺を抱き締めてくれている。

「何で俺の腕の中で泣かないんだ？」

健次郎先輩が、不貞腐れた様に言っつて来る。

もし、俺に兄貴が居れば 東條先輩のような人なんだろうな．．．
と自分で思っていたから。いつもこの先輩は、俺の事を影から日
向から俺を支えてくれる。

だからこそ、俺もこの先輩の後を追って、テニス部でもないのに、
練習に付き合ったり軽く試合をさせてもらったりしていた。

元々、俺は欧州テニス大会でも何度も優勝した経験もある。

だけど、テニスから少し離れたくなって、中学になってからテニス
部ではなく、帰宅部にしたのだった。

東條先輩のお兄さんは、東條 充 スポーツ雑誌に記事を書いてい
るスポーツジャーナリストで、俺がこの中高一貫校に入学して来る
事を知った人でもある。

何度か、取材に来てくれた事があったが、その度に俺は「テニスは
止めたんです。」その一言で終わらせた。

「君は、天性のテニスのセンスがあるのに、どうして止めたんだい
？ もしかして怪我でもしたのかい？」

「いいえ。そんな事はないですよ。」

俺の考えが掴めなかつたらしく東條充さんは、メモにペンを走らせ
ながら、キラリと光る黒目で俺を見て来た。俺は、この人とそして
横に居る東條先輩を見上げると、つい上目遣いの三白眼になって来
る。

「なら、どうして．．．。」

そう、どうして．．．そうなんだよな。

俺は、いつも聞かれていた。テニスを止めた時も、女に戻りたいと
言った時も、どうしてって。

これ以上 女にも男にもなれないかと言って、女に戻っても何をす

れば良いのか分からない。この男子校から出て行きたく無いしな．．．
．．．そう考えると俺って、狡いよな。どっちにも決められない．．．
．．．。

俺は、溜息をつくとも目の前に立っている2人を見て言った。

「他の世界も見てみたくなっただんですよ。時間をゆっくり感じたくなっただんです。タダそれだけです。」

そんな俺の気持ちを知ってか、東條先輩は俺をテニス部に誘うのではなく、空手部に誘って来た。何でも俺を入学初日に呼び出した連中は、空手部の先輩達だとか．．．。

「それって、ちょっと考えればヤバいんじゃないんですか？」

「ん。だな。でも、その空手部の部長は俺だから．．．．．。ただで誤解すんなよ。俺がお前を襲えとは言っていないぜ。あいつらが、お前に自分達の彼女を取られたと思っていただけだからな。」

彼女を取られた？ そっぴや．．．俺が此処に入学する前にパパと一緒に、ここの校長に挨拶をしに来た事があつたけど．．．。確か其の時に校長と一緒に体育館で空手部が今、他校との練習試合をしているから観に行きましょう．．．．と言われて見学しに行った時に、女共が群がって居たな。

俺の顔を見て、俺の側に群がって来た女達。あの時は、本当に奈良公園で鹿の大群に周りを囲まれているような変な気がした。

挨拶代わりに、少し愛想笑いをしたのがいけなかったのか．．．。それで俺は、入学初日に呼び出されたんだ．．．。

漸く、あの時俺を目の仇にしてグループで俺を倒そうとしていた人達の目が、殺気立っていたのも そう言う意味だったのか．．．。

先輩達の思い？（後書き）

クリスの入学初日のケンカの原因になった事を説明しています。

過去に戻ったりしてます。

思い出せない記憶

掌に乗せられた俺のピアス。それは白い花の形をした可愛いピアスだ。男の姿の俺がすれば、おかしいことこの上ない。

そんな自分の初めてのピアスを見つめていて、微かに思い出して来た。あの日のこと。

あれは、一ヶ月前くらいの事だったな、しかも俺が女装した次の日だったな……。

俺が、いつもの様に東條先輩を見上げる形で先輩の目を見てみると、にっこり白い歯を光らせながら俺に微笑んでくる。東條先輩の大きなごつごつとした手で俺の金茶毛の髪触りながら頭を撫でられると、俺はいつも先輩に抱き寄せられている。

これって、端から見れば危ない世界なんじゃないですか？

まさに、BLって言うような世界！

お、俺……そんな気はないですから……！！

そんな俺達を見て、聴診器を俺の背中に当てて俺の心音を聞いている東先輩は、面白くなさそうに肩を竦めて来る。

「普通の心拍だな。なぐんだ、クリスは東條の事を恋人には思っていないみたいだな。健次郎の時とは全然違うぜ、面白く無い。」

東先輩の得意の流し目で、俺の心臓はドキンと波打つといきなり俺の心臓は、早鐘の様になった。

俺の心音が加速して行くとその俺の反応を見て嬉しそうな顔をして、俺を見ている東先輩。

「やっぱ。クリスは、可愛いよな。俺達のマスコットだ。」

東先輩は、俺を抱き寄せるとにんまりした顔で俺を見て自分の腕の中でジタバタとしている俺の顔をじっと見ている。

そんな東先輩の肩をポンポンと叩いて来るのが、藤先輩。

藤先輩の悪魔の微笑みを見た俺は、（この人って、一体何を考えているのか、分からないから怖い．．．。）そんなのが藤先輩への第一印象だった。

藤先輩は、俺を東先輩から引き剥がすと、俺の顔をじっと見ていた。

「あゝ。何か着いてますか？俺の顔。」

「ピアス開けたの？」

いきなりの藤先輩からの鋭い一言にドキッとした。

まるで、草食動物を追い詰めて、のど笛を甘噛みして、痛ぶっている肉食獣のようだ。

しかも、終始あの藤先輩の天使の笑顔を俺に向けてるし．．．。

こんな事、妹のマリアに知れたら、何をされるかわかったもんじゃねーな。

冷や汗タラタラで、俺は、藤先輩の顔を見たが、目が右に左にと右往左往している。つまり、目が泳いでいるんだよ．．．。

これって、疾しいです！って自分から胸を張って言っているもんじやねーか！

「え？」

声まで上擦って来た。

俺は知らない間に、眉間に皺を寄せていたらしく、藤先輩は俺の眉間にそっと人差し指で撫でると、クスツと笑っていた。

その笑いって．．．？はバレているんだよって言う意味だよね．．．。

益々、俺の背中では冷や汗がタラタラと流れて来た。
藤先輩は、俺の髪を梳くと鋭い眼で一点を見ている。

「ほら、耳の此処の所、赤くなっているよ。」

ピアスを開けたのがバレない様に、髪で耳を隠していたのだがこの
藤先輩には、何もかもお見通しのようだった。

俺は溜息をつきながらも「虫さされですよ。先輩。」そう言うと俺
は藤先輩の柔らかい白い手で剥き出しにされた俺の両耳を金茶毛の
髪で隠した。

「クリス・・・昨日、街で会ったあの女の子と似てるよね。」

そう言って来た藤先輩。だけど、俺はその時の事なんて全く覚えて
いなかった。

キョトンとした顔で俺は、笑顔を讃えた藤先輩の顔を見てる。そん
な俺の背中に聴診器を押し付けて来るのは、東先輩。

この人、絶対俺の心音を嘘発見機のように面白がって使っている。
全く困った先輩だ。だが、俺の心音は平常だった。

俺の後で、両肩を竦ませる東先輩を見た藤先輩は、口の端を少し上
げて俺に微笑んで来る。

「僕との事を忘れたのは、悲しいね。」

「俺、知らないっすよ。」

無理もない。俺は本当に覚えていないんだからな。

思い出せない記憶（後書き）

藤先輩は、笑顔でクリスを尋問するのが得意です！

思い出せない記憶？

藤先輩は、俺を藤先輩の膝の上に乗せると俺を抱き締めている。

「あの〜藤先輩。」

俺は、藤先輩に返してもらった片方のピアスを耳にした。一月もしていなかったから、ピアスを通す時になかなかピアスの針が穴に通らず、俺は少し涙眼になりながらも着け始めた。

プチン！

そんな感じの音が聞こえて来た。半分塞がっていた所がどうやら開通したらしい。

一応、持って来ていた俺のもう一つのピアスを出す為に、リュックの中から箱ごと取り出した。

先輩達の前でならまあ良いか。

「何処か俺達だけになれる場所は、ないですか？」

と言う事で、俺は今 憧れの健次郎先輩の家に上がっている。

初めて入る健次郎先輩の家。健次郎先輩の実家は遠いからマンションに一人暮らした。たまに、実家から羊じゃなくて、執事さんがやって来て、掃除とか行き届いていない所をしに週に一度、この健次郎先輩のマンションに来る事が条件で此処に住む事を許されたんだと言っていた。

俺は、聳え立つマンションの高さにも驚いたけど、健次郎先輩の実家って結構な金持ちだったんだなと今頃知った俺。

藤先輩と東條先輩の間に挟まれて後からは、東先輩が来てくれる。

勿論、俺の前には健次郎先輩が歩いている。

そうする事で、俺の姿は他の人から見えない。先輩達なりに、俺の事を気遣ってくれているのが嬉しかった。

そんな事を考えていたら、また涙が頬を伝う。人知れず俺が、泣いているのを見て、藤先輩がそっと差し出してくれたハンカチ。いいにおいがした。

エレベーターに乗ると、俺達は最上階の15階に着いた。

今日は、丁度執事さんが来る日だったらしく、俺の姿を見た執事さんは、目が点になっていた。

思い出せない記憶 ？（後書き）

女になったクリスは、本当に泣き虫になってしまいました。

クリス君危機一発？

け、健次郎ぼっちゃま……。この方は、もしかして健次郎坊ちゃまの……。」

執事さんは、俺のパパと同じ年なのかな……。若く見ても、40代の気の良なおじさんだ。その執事さんに俺は連れられて、別の部屋に行かされた。其処には、一つの大きな箱が置いてあった。

執事さんは、ただニコニコしているだけだ。

俺の金茶毛の髪をゆっくりブラシで梳かしてくれた。

この執事さん、若い頃はパリで美容師をやっていたらしい。俺の髪の色を見て気に入ったらしく、昔取った杵柄宜しく！って感じで俺の髪で遊んでくれた。

後に一つに纏めた俺の髪を器用にクルクルと巻いて花のピンで留めた。泣き過ぎて、少し目が赤くなっている俺の目を見ると、少し冷やしたタオルをくれた。

俺はそのタオルで目を冷やしていると、「今夜は私も居りますので、此処に泊まって行かれては、どうですか？」いきなり言っただけの執事さんに、驚きながらも俺は振り向いた。

「積もる話もございましょう。ご自宅には、もうすでに健次郎坊ちゃまが先ほど、二日間泊まる事をお伝えになっていますので。」

「へ？」

「さあ、髪は出来ましたよ。先にお着替えをなさってはどうですか？私は皆様がいらっしゃる居間の方へ居りますから。準備ができましたら、来て下さい。」

執事さんは、そう言う部屋から出て行った。

一体、この家って何LDKあんだよ。

俺は寝室の所に置いてある箱に近づくと、そっと箱を開けた。

淡い紫色のワンピースだった。その横にネックレスもある。このネ

ックレスも紫色・・・アメジストだった。

何だか・・・俺の知っている健次郎先輩とは、違うような気がする・・・。

上着を脱いでいたら、誰かがノックも無しに突然入って来た。

クリス君危機一発？（後書き）

誰が部屋に入って来たんでしょうか？

クリス君危機一発？

「……………う、うわ！　なんで俺の部屋に女が居るんだよ！」

「い、イヤー！、ノックくらいしろ！健次郎先輩？」

其処に立っていたのは、健次郎先輩ではなく俺のクラスで隣の席の河合　章依だった。

下着姿の俺と其処に立ち尽くす河合。それから、俺の悲鳴を聞いた先輩達が慌てて、この部屋に入ってきた。

黒の下着を着ていた俺の姿を見た先輩達は、呆然と立ち尽くしていた。

藤先輩は「ほー。眼の保養になるな。クリスは。黒とはね……………」
そう言ってニッコリ笑っていた。

健次郎先輩は、顔が真っ赤だった。

東先輩は、俺の下着姿を見て「クリス、なかなか良いスタイルをしているんだな。では、心音をチェックさせてくれ！」そんな事を言いながら、聴診器を持って近づこうとしていた。

思わず、軽く足で東先輩の鳩尾に一発蹴りを入れた。

そんな三人の中で溜息をつきながらも、俺にバスローブを投げた東先輩は、拳骨で藤先輩、東先輩、健次郎先輩、そして河合達の頭に鉄拳を落としていた。

バスローブを着た俺は、改めて先輩達を見ると俺はベッドの上に座

った。

「狼になりそうですよ。先輩！それと、どうして此处に河合が居るんですか？」

俺は、この部屋に俺の下着姿を披露する事になった原因を作った、河合をプルプルと震える人差し指で、指差して言った。

河合は、怪訝そうな顔でバスローブを身に纏ったクリスを見た。

「クリス？クリスって、俺の隣の席の山口クリスだよな．．．。ふん」

そう言うと俺は、顔をリンゴの様に真っ赤にすると、つい河合の横っ面を平手で思い切り叩いた。

バチンと言う音と共に、河合の左頬には、季節外れの大きな紅葉がクツキリと浮かび上がっている。

その後、東條先輩に抱きつくこと泣いていた。

俺の頭を撫でて来る東條先輩は、俺に「落ち着け、クリス。河合章依は、健次郎の弟だ。」そう言って来た。

それを聞いた俺は、涙が止まった。

潤んだ瞳で東條先輩を見ると、東條先輩の顔が近づいて来る。ここ、これって、キスして来る気かよ！って感じくらい近いんですけどおっ！

「あ、あのおっ。東條先輩？顔が近いし、俺服着たいから、とにかく皆部屋の外へ出てよ。」

皆が、この部屋から出て行った後、俺はバスローブを脱いで箱の中

にある服を着始めた。

だが、体が固い俺は、後のファスナーに手が届かない。

そこで、部屋の外にいた河合を部屋に入れると「河合。ファスナー上げてくれ。俺、体が固くて届かないんだ。」そう言うと河合は無表情でワンピースのファスナーを上げてくれた。

「サンキュー。河合．．．さっきは悪かった。いきなり顔を叩いたりして．．．。」

俺がクルリと前を向くと河合はもう、部屋を出て行っていた。

クリス君危機一発？
？（後書き）

河合君、叩かれ損です。

変化ご披露

居間に行くと、みんな勢揃いしていた。

そこで、藤先輩が俺のバッグから小箱を取り出すと俺の掌の上に置いてくれた。

「おお。ラブリーなクリスマス登場だな。ほれ、クリスマス。俺の妹の服だ。カジュアルな物が良かったんだろ？」

東先輩が俺に向けて妹さんの洋服を見せてくれた。

Tシャツとショートパンツだ．．．ってこれってば、もろ東先輩の好みの女の洋服じゃねーか！

このムツツリスケベが！

「あ．．．でも、俺 元の体に戻りますから、大丈夫ですよ。」

俺は、先輩達の顔をじつと見回した。

藤先輩は、相変わらずニコニコと笑顔を讃えているし、東先輩は、すぐに俺の体にペタペタと触って来たから、俺は東先輩の腹に向けてボスツと一撃食らわせた。

そんな俺の行動を見て、ビックリしている健次郎先輩は、後に倒れそうになつた東先輩を受け止めてた。

東條先輩は、そんな俺達の事を見てただ笑って見ている。

河合は、無愛想な顔をして壁に凭れていた。

俺は息を深く擦って深呼吸をすると、小箱から黒い指輪を取り出した。それを左手の中指に嵌めると、俺の体の周りからモワモワと白い煙が立ちこめた。先輩達は、ソファーに深く座って初めは眺めていたが、俺の体が煙に巻かれるとソファーから身を乗り出していた。

煙が消えた後、俺の髪はいつもの肩までの髪の長さに戻り、胸はペツタンコだった。

「これが俺の秘密ですよ。俺、元は女だったんですよ、けどあの墮天使が俺の魂を三日の間、弄んだりしなきゃ俺は．．．別にこんな変態みたいな格好なんてならなくても良かったのにさ．．．。」

俺の服装は、さっきまで着ていたワンピースだ。

「健次郎先輩、俺着替えたいです。服貸して下さい。」
そう言つと河合が俺に服を投げて来た。

「オイ。河合！これって女モンじゃねーか！」

俺が怒つた口調で言つと河合は、口の端を上げて笑つた。
ドキン．．．。

ああれ？俺の心臓がドキドキして来るよ。

俺は、照れ隠しも入って来て、皆目の前で着替えようとしていると、ワンピースを脱ぎ始めた時に、健次郎先輩が慌てて言つて来た。

「クリス！お、お前．．．ぶ、ブラが．．．！」

真っ赤になつて俺を指差している健次郎先輩。

そして東條先輩は、面白そうに俺を見ているし、藤先輩は相変わらず微笑んでいるけど．．．。

「やっぱ、クリスって、黒が似合うね。」

「へ？あ．．．俺 下着は女物だ．．．。」
「がっくり来ると、指輪を再び外す事にした。」

モワモワモワとまたまた煙が上がると俺の姿は女へと変身した。先輩に溜息を付きながら「俺は、週末女の俣で過ごしても良いですか？俺、これに着替えて来ます。」そう言って河合の部屋へ行くとサツサと男物の洋服を着るとまた居間へ行った。

「サイズは合っているか？」

「先輩、これ、胸が窮屈です……。」

「ふん。って事は、東の妹よりも胸はデカカッタのか。じゃあ、ウエストは？」

「ウエストはブカブカです。」

「って事は、東の妹よりも、スタイルは良いんだな。」

東條先輩の言葉に俺は、ウンウンと頷いた。

「文句言つな！クリス！」

河合から怒られた俺は、唇を尖らせた。

少し涙目になっている俺は、東條先輩の後に隠れると、口惜しそうに河合に向って言つてやった。

「お、女には、優しくしなきゃいけないんだぞ！」

何だか、女に変身すると涙腺がもろいんだ。

さっきまで着ていたワンピースは、丁寧に畳んでいると健次郎先輩から「それは、俺からクリスへのプレゼントだから、貰ってくれ。」と言つて来た。

さっすが〜お坊ぢやま。太っ腹だね〜。
貰えるもんは貰っておこう！

俺は指輪を小箱に入れて置くと溜息をついた。

大きな革張りのソファアの中央に座らされた俺は、先輩達に囲まれてさっきの続きを話せと突っ込まれていた。

何度目かの溜息をついた後、俺はポツリポツリと俺の呪われた体とこんな体にしてくれた神様、そして墮天使のマリアの事を話始めた。全てを黙って聞いていた先輩達と河合は、俺の話が終わると同時に、今後の事を話始めた。

俺は一日に何度も男から女へと変身し過ぎて、体力を消耗してしまっただようだ。瞼が段々と重くなつて来て、俺は隣に居る河合の肩に凭れる様にすう〜すう〜と寝息を立てて眠っていた。

盗まれた物

女の姿に戻ったクリスは、事もあるうか健次郎の腹違いの弟である河合 章依の肩に凭れて寝ている。

健次郎は、ゆっくりクリスを自分の方に向け、自分の肩に凭れさせようとしていたが、寝ぼけているクリスは、章依の服を握ったまま眠っていた。

藤は、そんな2人のやり取りを見て、いつもの様に笑顔を讃えている。

「まあ、兄弟2人でクリスを奪い合わなくても良いでしょ。じゃあ、と言う事で、僕がクリスを寝室まで運んであげるからさ。」

藤が、クリスの肩をトントンと叩くとクリスは、自分の腕を藤の首に巻き付けて来た。

お姫様抱っこされたクリスは、そのまま藤に章依の寝室へと連れて行かれた。

健次郎も、東も「藤に任せて大丈夫なのか?!」と言っていたが、藤はすぐに帰って来た。

東條は、クリスの貞操の危機を心配している健次郎と章依の顔を見て、明るく笑ってる。

「藤なら、大丈夫だ。眠っている女を襲うような事はしないよ。ま、最も、藤なら起きてる時にクリスに言いよる事はあるだろうがな。そうだろ? 藤?」

居間の扉をパタンと閉めた藤は、静かに微笑んでいる。でも、目は、鋭く東條を捕えていた。

「ああ。そうだね。やっぱり、クリスの反応が面白いからね。起きた時に、先月の事でもゆっくり思い出してもらわないとね……。」

何せ、僕の大事な物を盗って行ってしまったんですからね。あのクリスは。フッフ。」

東は、両肩を竦めるとヤレヤレと言う感じで執事の羊さんが、入れてくれたコーヒーを飲んでいた。

「大事な物を盗られたのは、藤だけじゃないぜ。俺もだし、東條もだ。それに健次郎もそうだろう。それと弟の章依だって。そうなんだろ？これ見よがしに、俺達に見えない様に眠ってしまったクリスの奪い合いをしていたのは、俺達全員知ってるぜ。」

盗まれた物（後書き）

クリス君、君は一体何をしたんでしょうか？

悩める先輩達

「「「「「はあ〜」「」「」「」

色男4人で溜息何ぞをついている。

藤は携帯電話を開くと何処かに電話を入れていた。

電話が終わった藤は、皆の所へ戻ると、笑顔で言ってきた。

「クリスの家には、日曜まで泊まる事になっていると言っているから。」

「それにしても、クリスには驚かされるな。まさかクリスのお祖父さんって人があ、あの、ケビン＝ラブバトリーだったとはね。あの爺さんの孫なら、強いわな。そりゃ……。だけど、確かクリスってそろそろイギリスに帰るって言う噂が出ているけどな……。あいつ何も言わねーけど、ラブバトリー家は、公爵の家だしな。爺さんが代わりモンだったって事しかクリスは知らなかったようだが……。」

東條の一言で他の4人は驚いていた。

「と、東條……。お、お前、何でそれを知ってた？」

健次郎が真っ青な顔をして聞いて来た。どうやら、健次郎と章依兄弟はその事をいち早く知っていたらしく、今後クリスにどう接して良いのか分からず、兄の健次郎はクリスを毎日抱き締める事で（俺を忘れるなよクリス〜！）クリスに自分の愛情を知って欲しかったそう。弟の章依は、自分の淡い恋心が本物なのかどうなのか分かんなく、動揺するのが怖かったと言う事で、ワザと冷たくクリスと接

していたと言う訳だ。

何にも知らないクリスは、この事を知ったらどうするのだろうか？ それこそ、俺達の大切な物をクリスに盗られたまま、クリスは国外に逃亡してしまっただろうな．．。

5人が5人ともクリスに盗られた物。

それは、心です。5人とも、ストレートな人間だったけど、やはりクリスの雰囲気と可愛さに構ってしまいたくなるのだ。

彼ら達は、もしかして自分が男色だったのではないのか．．？と悩んでいたほど、クリスにのめり込んでいた。

クリス自身、誰にも頼る事は決してしないし、それどころか空手の腕はここに居る誰よりも強いと言うか、強過ぎる。

その謎も、クリスの話で漸く分かった。

クリスの爺さんがまさかあの老人の孫だったとはな．．．。

「まークリスが女だったって事が、分かってホツとしたんだよな。

俺としてはさ。そう言う理由は、オメーラも同じだろ？そうじゃなきゃお互いで、クリスの事をからかうような真似は出来ねーしな。それに、章依は自分で態々クリスを避けていたんだって？それでも、こうやって惹き付けられるのは、クリスの可愛さと人柄なんだよな。ま、クリスが誰を選んでても文句は言うなよな！」

東の言葉に他の4人は頷いた。

「だけどよー。藤先輩ってば、どうしてクリスが失したピアスを持っているんだ？」

章依が藤先輩に聞いて来ると、他の3人もウンウンと頷いていた。

藤先輩は、意味ありげにクスツと笑うと自分の前髪を掻き分けると、さっきから出されているコーヒーを漸く飲み始めた。

温くなっているコーヒーを美味しそうに飲んでいる藤先輩を見て、
章依は 冷めたコーヒーの何処がそんなに美味しいんだ？と呆れた
目で見ている。

藤先輩は、極度の猫舌でコーヒー、紅茶、緑茶、それにスープ等
全て温くなるまで冷まさないとい飲めない程だ。そう言えば、そう言
う所は、クリスマスと似ているな．．。

章依は、クリスマスが自分に注がれたコーヒーが、人肌にまで冷めるま
で口を付けなかった事を思い出した。

「そんなに知りたいかい？」

「．．．ああ．．．」

4人が身を乗り出して聞いて来ると、藤先輩は「そうだな．．．」
そう言いかけるとスクツと立ち上がって、居間のドアを開けた。
ドアを突然開けられて、居間の床に突っ伏す感じで倒れ込んで来た
クリスマスを見て、「やめた。だって、僕の事をクリスマスが思い出すまで
お預けだな。」そう言うのと楽しそうに、踵を返すとソファーに歩む
とゆったりと腰を下ろした。

床に突っ伏した俣のクリスマスは、居心地悪そうに頭を掻いていた。

4人は、一体クリスマスと藤 ？との間に何があったのだろうかと模
索していた。

眠りの国のクリス

一日で何度も男になったり女になったりと変化してしまった事で、体の細胞の単位から悲鳴が出て来そうな疲れがどっとクリスを襲った。

右に憧れの健次郎先輩、そして何故か俺のクラスの隣の席のミスタークール君事、河合 章依が俺の左に居る。

これって、もしかして . . . 俗に言う逆ハーレムってヤツですかあ？俺が、純粋な女だったら、この状況ってヨダレが出るほど嬉しい状況なんだろうな。

だけど、俺ってば、半分男で半分女と言うか . . . 女になったのって、この13年間で数えるほどしかない。しかも片手で足りる . . .
。TZ

ケーキを食べたいと言う欲望で、軽はずみな行動を取ってしまった自分が蒔いたタネ . . . 。

(でも、初めにこんな面倒臭いタネを蒔いたのは、墮天使のマリアだ！)

いつの間にか責任転嫁してしまっているクリス。そんな事を考えながらも、ウトウトとして来た。

いつも左肘を付いて寝ているクセがついているせいかな、自然と体が左に傾いて来た。

暫くうたた寝していると、右の方に無理矢理向かされそうになった自分でも無意識にだが、ついクセで布団のカバーとか、シーツを握るクセがあるのだが、それでシーツっぽい物をギュツと握りしめてしまっていたようだ . . . 。

一体何を握っていたのかは、クリス自身全く気がついていない。

これは、後で河合の皺くちゃになった洋服を見て、クリスは顔から火が出る思いだった。

藤先輩に肩をトントンと叩かれると、クリスは握っていた章依の服

を離して、藤先輩の首に抱きつく感じでお姫様抱っこされると、そのまま部屋へと運ばれて行った。

そんな藤の役得に皆の目が集中したのは、言うまでもない。

ベッドに静かに下ろされたクリスは、「ムニヤムニヤ」と寝言を言いながらも、シーツに包まって眠ってしまった。

藤先輩は、そんなクリスに苦笑しながらも、そつと金茶色の長い髪を撫でていた。

一房だけ長さが不揃いのクリスの髪を見て、苦笑しながらも、（色気よりも食い気ですからね。僕らの姫君は）心の中でクスツと笑うと髪に口付けをした。

寝返りを打っているクリスに藤は、微笑みながら部屋の電気を消した。

「早く思い出して下さいよ。お姫様。」

意味深な言葉を残して、藤は部屋を後にした。

眠りの国のクリス？

「早く思い出して下さいよ。お姫様。」

意味深な言葉を残して、藤は部屋を後にした。

その間中、ずっと狸寝入りをしていた訳ではないのだが、クリスは夢の中で皆の声を聞いていた。

真っ暗な夢の中、一人で泣いているクリスと良く似た長い金茶色の髪をした少女。そしてその隣には同じようにクリスと似た顔をした肩までの金茶色の髪をした少年がいた。

少年は、ムスツとした表情でクリスを見ていた。

ずかずかとクリスの前までやって来ると、どうやら自分はこの少年に嫌われているらしいと直感でそう悟った。

嫌そうに眉間に皺を寄せている、その少年はクリスの腕を掴むと泣いている少女を指差して言った。

「なんでコイツをもっと表に出してやんないのさ！お前は、本当はこの世界に居るべき人間では無いんだぞ！」

「へ？俺がこの世界に居るべき人間じゃないって・・・どう言う事？」

少年は、ふうーと溜息をつくと、綺麗な柳眉を片方だけ器用に上げて、クリスを見る。

「お迎えが来たんだ。」

「お迎え？それってどう言う事なのさ？」

何を言われてもチンプンカンプンだったクリスは、今この目の前の少年に言われている事自体、信じられない事ばかりだった。この少年が言うには、自分が地球外生物だったと言う事だ。それって、俺ってば宇宙人じゃねーか！何かスッゲー！って感動してたら、頭痛がして来たと額に手を当てて悩んでいる少年。

「クリスは、元々天上界のタクウールと言う国の姫なんだ。」

「ふーん。それって、両生類な訳？」

クリスが2人を指差して言ってみた。

少年は、肩を竦めると苦笑しながらも「ま、そんな物だな。」

そう言うつと話を続けてくれた。

「我ら天界タクウールには5つの天上界の層があつてな。それぞれに王国が実在する。大昔の予言書に寄れば、タクウールから生まれでし姫は、二つの異なる姿を持つと言われてるんだ。5つの大国にはそれぞれ王国がある。その王国の王子達はその予言された姫を探しに方々を探して回つたが、見つからず途方に暮れていた所だったんだ。」

それがだ、イタズラ天使が、姫の魂を勝手に持ち出して、人間界とか言う所に持って行ってしまったんだ。もしタクウールから姫として生まれ出る方の魂が、盗まれたとなるとこの地上界も巻き込んでの大規模な戦争と成り得るからな。。そこで、5つの国の王子達に白羽の矢が当たつたのだ。姫を探して連れ戻してくれとな。そうしないと、タクウールは近々闇の力に呑み込まれてしまうのだ。そうなる前に、早く姫を取り戻して、この天界タクウールに戻つてもらわないと。。。」

「ふ〜ん。何か凄いSFスペクタクルだな。でも、俺その天上界タクウールの事なんて何にも知らないぜ。それに、タクウールなんて俺には関係ないし。天上界で起こった事を簡単に変更なんて出来る分けないだろ？」

胸の前に腕を組んで話しているクリスは、今日の前にいる少年が自分に話して居る事は、まるでお伽噺かただのSFの世界に思えてならなかった。21世紀のこの時代に、何で俺が異界人なんだよ。それが本当なら、映画みたいに黒いスーツを着て、グラサンをかけた男達が俺の前に現れて来る筈だろ？

そんな事を思っていたクリスは、疑いの眼で少年を見ていた。

そのクリスの眼差しに、いたく傷ついた少年は、空間に手を翳すと画像が出て来た。

すると、俺が産まれる前の映像が出て来た。

瑠璃色の地球か？！と思わせる程の綺麗な天上界タクウール。5つの天上界は、全てタクウールの大陸にある遺跡の門からしか出入りが出来ない様になっている。

ふ〜ん。つて事は、関所なんだな。

タクウールの中心にある神殿らしき物が、気高い白き山々の頂上に聳えている。(まるで、アルプス山脈だ)そこから白く輝く球がクルクルと弧を描きながら、出て来たと思ったら、それを捕まえたのが、墮天使マリア。

アイツ．．．他の世界でも悪さばかりしてたんだな．．．。

追いかけて来るタクウールの神々のタツクルを素早いフットワークで避けると、亜空間の中にワープして行った。

マリアが持つて行った白く輝く球は、俺の魂と言う訳か．．．。ん？でも、蜘蛛の糸みたく、細く長くたなびいている一筋の糸が、真つ暗な空間の中をキラキラと輝かせながら光っている。

どうやら、その蜘蛛の糸のような俺の魂の糸を頼りに、追跡調査が行われたと言う訳だ。

前代未聞の事をやらかしてしまつた墮天使は、宇宙を司る神様に大目玉を食らわされて以来、俺と一緒に住んでいる訳だが、どうせなら別の優秀なヤツを着けてくれた方が良かったぜ。

「ただ、そんな墮天使マリヤの行動を予測する事は出来た筈なんじやないのか?」と思つていたら、どうやらよくある大昔の偉大なる魔法使いが予言を出していたんだつてさ。

「天変地異の前触れに、我天上界タクウルから二つの心を持つた姫が誕生する。姫は、誕生する前に心なき者に連れ去られてしまうだろう。」

この心なき者つて、やっぱ、墮天使のマリアなんだよね。アイツはやっぱりルシエファーつて名前が似合うぜ!

その前に、姫様の居所が分かる様に黒き指輪を姫の魂の中に入れて置くようにと、代々伝えられて来たんだそうだ。

へー黒い指輪ね。

そんなもん何処でもこの世界になら、いっぱいあるしな!。つて思つていたら、目の前の少年から黒い指輪は持ち主を選ぶんだと言つて来た。どうやら、指輪は俺で無いと嵌らないし。他の人が好奇心で自分の指に嵌めようとするとその人を破壊してしまうんだと言つて来た。

それを聞いた途端、クリスは「早く起きなきゃ、ヤベーじゃんかよ!」そう大声で言つと少年は笑つていた。

「お前の周りに居る者達は、全て我らの使者達だ。だから、そのような要らぬ心配はしなくてもよい。」

つて事は、先輩達つて皆 天上界人つてこと?それつて、河合も含めてか.....。

ふと思つたから、この少年に聞いてみた。

「でもさ、あんた達 誰？」

俺の素朴な疑問に今まで泣いていた少女は、驚いた顔で振り向くと俺を見据えた。

「私は、あなたよ。クリス。」

「そう、俺も。お前だ。クリス。」

眠りの国のクリス？（後書き）

クリスがクリスとお話〜！！

記憶の扉　忘れかけた記憶？

其処で目が覚めた。

何なんだあの夢は、ガバツと起き上がって、自分の右手を見てみた。指輪が無い……。何処だ……。あ！居間のコーヒーターブルの上に箱ごと起きっぱなしになっていた。その事を思い出したクリスは、抜き足差し足で居間へと向った。

何やら居間では、先輩達が俺の事で話をしている。

よく聞こえる様にとドアに耳を着けて聞いていたら、いきなりドアが開いてしまつて、床にそのまま突っ伏してしまつた。

はははは……。と頭を掻いて笑つてみたが、何だか妙な雰囲気だ。

皆さん、俺の顔を見てる？

目の前の景色が少し揺らいで見えて来た。

目を擦るが、皆の服装が制服じゃない事は確かだ。

もしかして、あの夢の中の話は、本当だったのか……。？

その時、俺の記憶の扉が一つ開き始めた。

忘れかけた記憶

まるで、上からVTRを見ているようだった。

ああ、あれは一ヶ月前のあの日、そうだ。俺は、ケーキを食べに行きたくて初めて女装をしたんだっけ。

13年間外した事のなかつた中指に嵌めてある黒い指輪を外した時は、驚いたな。

白い煙か霧がモクモクと上がって、俺を包んだかと思つたら、俺の体は女になっていた。

今までも、電車とか乗っているとこの女顔の所為で、男だと分かっていても俺の尻とか撫でて来るヤツが居たから、そいつは勿論肩を外してやった。当たり前だ。そうでもない俺は先輩達と一緒に遊ぶ事も出来なくなるからな。

先輩達との遊び・・・ナンパだ。

ただ単に俺が立っているだけで、どんなヤツが声をかけて来るのかと言つまあ、一種の賭けだな。

藤先輩以外は皆、女に賭けていたが、藤先輩は何故か俺が高校生、大学生の男達に声をかけられるのに1000円！と言って賭けていた。

他の先輩達は、小学生、OLのお姐さん達にお声がかかると言っていた。

結果？

仲宿の駅前で、俺は時計とニラメッコしながら1時間立ち尽くすそれだけの事だ。

その間、俺に声をかけて来たのは・・・。

男達だった。女も居たが、やっぱり20人中6割は男だった。

男に声をかけられた時は、すかさず藤先輩が出て来て俺を迎えに来てくれた。

女の場合は東先輩や東條先輩が出て来る。

健次郎先輩は、集計と言う事になっているので、茂みですつと数の確認をしているだけだ。

記憶の扉へ忘れかけた記憶？

あの日は、初めて女に変化した日だった。

花柄のミニスカに、黒の開襟シャツの様な前にレースが着いているのを来て、耳には白い薔薇のピアスを嵌めていた。

俺は嬉しそうにケーキ？ケーキ？と走っていく。俺は急いで仲宿に新しく出来たケーキ屋に走って行っていた。

何て言っただて、新装開店祝いで、先着300名様 of ケーキ食べ放題と言っていたからだ！これは、見逃す手はない！

いつものように男に声をかけられまくれ、頭に来て足蹴りにして相手を伸してから、走って角を曲がった所で健次郎先輩にぶつかってしまった。

あまりの衝撃に俺は頭を打ってしまったのかと思っただが、目を開けると俺の体を受け止めてくれた健次郎先輩が、俺の下敷きになっていた。

その時の状態って言うところ．．．健次郎先輩の上に馬乗り状態。しかも俺の胸は健次郎先輩の顔に押し付けられていた。

まさか、あの時 健次郎先輩に俺の瞳の色を見られていたなんて知らなかった。

俺の瞳は、結構珍しいらしく光の加減で紫に見える。いつもはカラコンをしているから、皆と同じで黒目なのだが．．．この日はカラコンを着けてなかったから、俺の瞳は紫色だった。俺を抱き起こした先輩は、俺の顔を見て、「クリス？」って聞いていたけど、俺は真っ赤になっていた。急いで離れようとした時だった。

その時、俺の髪が健次郎先輩の胸のボタンに絡み付いて取れなくなった。ケーキ屋は目の前．．．。ケーキが．．．そこで俺はとっさに「ご、ごめんなさい。健次郎先輩！」そう言っくと絡まっていた髪の毛の先端を引きちぎると脱兎のように、俺は目の前のケーキ屋に飛び込んだ。

セーフ！

丁度、俺がケーキ屋に飛び込んだ所で300人目！

やったね！

嬉しそうに俺はケーキを頬張っていた。

おいしいケーキを食べて満足した俺は、すっかりこの事を忘れていた。そしてその後の事も……。

300人目と言う事で、俺は特別にケーキをお持ち帰りする事が出来た。

それを持ってルンルン気分で我が家に帰る途中に、俺はまた男達に絡まれた。

臨戦態勢に入る前に俺は、ケーキを守らなきゃいけないって言う考えが強く働いて、つい大人しくしてしまった。

結果、奴らに公園の茂みに連れて行かれた俺。

そんな俺の姿を見かけたのが藤先輩らしく。

俺は、ケーキの箱を抱えたまま、立ちすくんだ。その時に俺は自分の力を使ってしまったのだらう。気がついたら、俺の周り……半径2メートルくらい芝生も木も無かった。俺を連れて来た男達も周りには居なかった。

俺は、ぐったりとその場に倒れてしまっただらう。そんな俺を優しく抱き寄せるとお姫様抱っこをして俺を家まで連れ帰ってくれたのが、藤先輩で、どうやら俺のピスは、俺が自分の力を出してしまっただけで、吹き飛ばされて藤先輩が隠れていた足下まで転がって来たと言っただけだ。目を開けると俺は家のベッドで寝ていたし、家族は俺がお持ち帰りしたケーキをたらふく食べていて満足していた。

俺はどうやって家に帰って来たのか、その時の記憶が完全に抜けなくなってしまった。

目の前に映っていた映像が、揺らいで来た。

俺の力……。

じゃあ、俺って本当は何者？

床の上にペタンと座った俺は、体育座りのように膝を抱えて丸まっていた。

「ふ．．．．藤先輩は、見たんでしょ．．．？俺の力を．．．俺のバケモノみたいな力を．．．。」

カラコンが無い状態だった俺の瞳は、紫色から深紅へと変わって行った。深紅の俺の瞳から流れるのは、絶望と言う意味の涙だった。

「お、俺は、一体何者なんすか？俺は、どうすれば良いんすか？．．．．．こんな先輩達や、河合の事が好きなのに！．．．．．もう女だとバレて、その上こんなバケモノみたいな力があるなんて分かったら、もう俺は此処には居れない。」

健次郎先輩が俺に何か言っていたが、俺の耳には聞こえなかった。大好きな憧れの先輩の声を聞く事さえも拒否したのは、俺自身。いや、何も聞きたくなくて、俺の周りには薄い乳白色の膜が幾重にも重なっていた。まるで真珠のような球体に俺は、自分を包んだ。俺自身を守る為に。

そしてこれ以上、誰も傷つけない為に。俺が大好きな先輩達や河合を守る為に。俺は自分自身に殻を被せた。

もう、何も見たく無い．．．．。先輩達の優しい顔が恐怖で引き攣るような顔になるのは、俺は見たく無い。

記憶の扉／畏怖の味？（改）

目を瞑っていたクリスは、また深い眠りに入る。未発達の上に慣れない力を使ってしまった事もあって、自分を守る壁の中で気絶してしまっている。健次郎が慌ててクリスに近寄ろうとすると、東條先輩が健次郎先輩の腕を掴んだ。

「健次郎！止めないか！今、お前がこの球体に触れればこの建物ごと吹っ飛んでしまうぞ。こうなったら、クリスの両親を此処へ呼びするしかないな。」

東條先輩に言われて、健次郎は自分の起こしかけた行動がどれだけの騒動を起こす事になるのかを知って、頂垂れた。

東條は、魔具を使わずに済んだ事にほっとしていたが、自分達の側に控えていた執事の羊さんから、電話を受け取るとすぐにクリスの家に電話をかけた。

球体の中のクリスは、自分の外の世界で何が起きているのかわんて何にも知らなかった。

ただ、自分が今は一人になりたいのとこれからどうして良いのか分からなくなってしまったのだ。

それに、こんなバケモノの力を持った自分の姿を先輩達にさらす事になるなんて、クリスのガラスの心は砕けそうだった。

それなのに、また俺の眠りの世界に無断でズカズカと入って来る人のクリス達。

そして彼らは、俺に言って来る。

「お前の力は、天上界を守る為に使うもの。早く天上界へ来い。クリス。」

天上界天上界って、オメーラの言いたい事はそれだけかよ。心の中で舌打ちをしていた俺。

そんな俺の心の声などお見通しだと言わんばかりに、目の前の2人は苦笑する。

俺は、慌てて彼らに聞く。

「なあ、俺のパパと母さんはどうなるんだ？」

「彼らは、イールメークト宰相夫妻ですよ。姫様が誕生されるまで、天上界を神様の右腕となつて代理として統治されていた方々です。我らがお前を守る為に送り込んだガーディアンと言うよりも監視役だ。お前の力を地上で使わせない為に見張りをさせていたのだよ。だが、もうお前は目覚めてしまった。早く我らが待つ天上界へ。」

俺は、彼らから自分の両親は俺の力を監視する為の監視役だったんだと初めて知った。

毎朝、白いワイシャツにネクタイを締めて、母さんからの熱いキスをと抱擁を受け止めて会社に通っている、あのパパが……宰相？

？だろ……。

俺、何度かパパの会社に行った事があるが、自慢じゃねーけど、ウチのパパは平社員だ。

だけど、人当たりが良いせいか、常にパパのデスクの上には、募金箱ならぬ「相談箱」を設置してある。

不思議に思つてその時に、パパの同僚の人に聞いたんだよな。

「あれって、何？」

「ああ。山口さんのデスクの相談箱ね。実はね、君のパパは、色々

な人の悩み事を聞いてそれを解決するのが上手なんだよね。それがいつの間にか車内に広まったって訳だよ。」
そう言うとメガネをかけていた同僚の人は、笑っていた。
あれも、任務だったのか。。。

「じゃあ、俺に親は居ないのか？」

「クリス。あなたの親は、天界タクウル。」

俺に親は居なかったんだ。。。安堵と言っか、淋しく思えて来た。13年間と言う濃度の濃い思いで、幾度となく、あの母さんの実験料理の実験台にさせられてしまっていた事や、妹のマリアの数々の俺に対する仕打ちとも取れる悪戯。

それは、次の機会にでも暴露する事にして。。。俺が、色々と考えを頭の中で巡らせていると目の前の2人の表情が、少しだが笑ってるのか、引き攣っているみたいだ。

「クリス。お前の力の存在を知った者は、この人間界に何人も居る。。。。。」

突然、彼らの声が聞こえなくなってきた。何だか大事な事を言ってきたような気がするんだが。。。。。

俺は、此処から先どうすれば良いかも分からない。

ゆっくりと目を覚ますと、微かに聞こえて来る俺の両親の声。

「。。。ス〜！」

「クリス〜！」

俺を覆っていた膜が少しずつ解ける様に一枚一枚、空気の中に消えて行く。

最後の一枚になった時に、俺はパパと母さんを見た。目を見張った俺は、悲鳴のような声で叫んだ。

「ち、違う！母さん達じゃない！アンタ達誰だ！」

俺がそう叫ぶと後一枚だった壁は、いきなり幾重にも重なった壁へと変化してしまった。

俺の目に見えたのは、母さん達ではなかった。あれは、悪魔？鬼？それとも餓鬼と呼ばれる醜い者達なのか・・・？

俺の視界に見えた物は、赤銅色の肌をした身丈が天井にまで届く程高い二人組。その2人の目は、大きく窪み、その中には色々な魍魎が、ウジ虫の様な物が 黒くぼっかりと大きく開いた二つの穴から、ウヨウヨと這い出て来る。2人の体は、まるで昔 歴史の教科書で見たような餓鬼のように、肋骨はおろか骨盤までクツキリと分かる程、痩せこけている。髪は血が乱れ、その中からは蛇やミミズ、ムカデが彼らの頭の上を這いずり回っている。耳まで裂かれている大きな口には、血で汚れたのか、所々に肉片がこびりついた茶色く尖った牙を見せて、舌なめずりをしながら俺に向かって笑いかけている。

指には黒く尖った爪が俺を覆っていた膜を一枚一枚剥がしていたのだろう。爪の中にカスとして入って行く俺のガード。それを美味しそうに奴らは見ながら、自分の爪を舐めていた。

東條先輩は、右手をクリスの両親だと言って来た2人に翳すと彼らは、東條先輩の右手から発せられる真っ白い光を受けて、粉々になっってしまった。

「お見事！東條！」と拍手するのは藤先輩。

「やっぱり、すっげーな。東條は。」と東條先輩の肩をポンポンと叩くのは、東先輩。

「俺も、そんな力があればクリスを助けられるのにさ・・・」と

いじけるのは健次郎先輩と河合。

「俺らの力は、それぞれが役割とか違うからな。そうだろ？藤。東條先輩は、右手に革手袋を嵌めると藤先輩を見て笑っていた。そう彼らも天上界の騎士団達。」

東條先輩は、武術に気を使った術に長けている。

東先輩は、医療術師として天上界では、姫に使える人だ。

健次郎先輩は、姫の守り役を勝手にしている。本当ならば剣術や竜剣士として空からクリスの事を見守る筈だったが、クリスに心を奪われ、自分からクリスを天上界へと連れ戻す隊員のメンバーに名乗りを上げたのである。

河合は、本来ならば何もなくても良かったのだが、彼は、健次郎の後をくっ付いて天上界からやって来たのだ。

藤先輩は、天上界の仕来りを姫に教え、諭す役でもある。

そんな一見和やかなムードに水を注す様に響く呼び鈴の音。

ピンポン

「山口です。クリスがお世話になっていきます。東條さんからお電話があつたので来ました。」

さつきクリスの両親だと偽って入って来た人物とソツクリだが・・・健次郎は、2人を家に招き入れた。

居間に不思議な球体となっているクリスを見た両親は、5人に何があつたのかを問いただした。

床に残る塵の事も一緒に。

そこで、5人はクリスが自分の力に目覚めてしまった事を話した。

「全て、包み隠す為に大事に男として育てて来たのに……。あな
た、こうなったらイギリスに帰りましょう！早く行かなければ天上
界への扉が消えてしまいますよ！」

普段は、人間界と天上界の扉は、閉ざされている。

天上界から人間界へはいつでも行けるのだが、人間界から天上界へ
は、おいそれと軽く行けるものではない。天上界からの橋渡しであ
る扉が開かれなければ、人間界から天上界へはいけないのだ。

それに天上界の扉が一度開くと閉まるまでの時間は、天上界の時間
を使う事になっている。

制限時間数秒。

これを地上の時間に直すと、1ヶ月となる。

今回の天上界への扉は、どうやらイギリスのラブバトリー家の納戸
に隠されている大きな古いタンスにセットされてしまったようだ。

藤は綺麗な顔にピクピクと皺を寄せながら、クリスの両親達に聞い
て来た。

「扉はいつ発動されたのですか？」

「ついさっきだよ。私達も天上界から連絡がきたのだよ。」

「私は、メイクをしていたら、鏡がいきなり反応しちゃって、折角
マスカラを着けていたのに、どこに着けたか分からなくなって来て、
結局もう一度最初からメイクのやり直しになっちゃったのよね。」

それを聞いてた東條は心の中で悪態をついていた。

（だから、来るのが遅かったのかよ……。んな事してつから、人
間界の下衆どもの方がアンタ達に成り済まして此処に来たんだよ。
。。全く困った人達だぜ。）

クリスの母親は、クリスの球体にそつと手を触れると一枚一枚ビリビリと壁を剥がして行った。

最後の壁を剥がした後、クリスの肩を掴んだ彼女は、クリスを揺さぶり起こすと笑顔で言ってきた。

「ご飯は何か良いの？今起きなきゃ、母さん特性のポットパイを食べさせるわよ！」

その一言で、クリスの目はパチリと開かれた。

「お、俺……起きたから。あれ、食べたく無い！」

途切れ途切れにそう言うと、首が引きちぎれるかと思う程クリスは自分の首をブンブンと横に振っていた。

その時、執事の羊さんがぺこりと頭を下げると一言。

「皆様。お食事のご用意が出来ました。食堂へどうぞ！」

それを聞いたクリスのお腹は、ギョルギョルギョルルルルル！まるで怪物でもお腹に飼っているかの如く、豪快なお腹の音が鳴った。

急いで食堂へ行くと椅子に座って右手にナイフ左手にフォークを持って、今か今かと料理が運ばれて来るのを待っていたクリスは、自分の目の前に置かれた料理を見て、気絶した。

記憶の扉〜畏怖の味？（改）（後書き）

次は、クリスの母さんが作った実験料理の話です。
これを食べれる人は、凄いだろうな・・・。
食べてみたい人は、すぐに作ってみよう！度胸試しだ！
具合が悪くなっても、責任は持てません。

記憶の扉〜畏怖の味？

この日の夕飯は、白身魚とピーマンのポットパイに、生サラダ、果物だった。

その料理を見たクリスの母さんは、苦笑していた。

「あ．．あのね．．．。実は、クリスってばポットパイが苦手なのよ。カクカクシカジカ．．．と言う訳なの。」

クリスが気絶した理由を知った5人は、この豪快で実験好きな監視役兼人間界でのクリスの母親に、恐れをなした。

それは．．．。この母親 山口 美和子の趣味は料理実験。

しかも、子供達にどうやって彼らの嫌いな食べ物美味しく、且つ分からない様に騙して食べさせるかと言う事に執念を燃やしている。5人も、その料理の内容を聞いて吐き気がして来た程だった。

6年前に遡る。

クリスがまだ6才か7才の頃だった。

ピーマン嫌いなこの少年に（一応天上界の姫君）なんとかしてピーマンを美味しく食べさせようとしていた美和子は、あるテレビの料理番組でピーマン嫌いの子供をピーマン好きにさせる料理を紹介していた。

それが、ピーマン入りのポットパイだったと言う訳だ。

だが、この母親と来たら、恐れ多くも天上界の姫君に食べさせるのに、実験？と言いまながらそれを実行してしまったのである。

しかも、料理のレシピを正しく記憶せず、（あ！ここがピンポイントね！）ただ自分の思考も入れてアレンジをかけにかけすぎたのだ。（つまり、自爆？でも、自分は食べずに人に食べさせるからね〜質悪い）

美和子曰く。

「いやね．．．本当ならば、ピーマンをココア小さじ1/2で煮るとピーマンの青臭い臭いと苦い味が消えるんですって。だけど、どの位入れているのか忘れちゃっていてね．．．。だから小さじ2杯入れたココアでピーマンを煮ちゃったの。ほほほほほ。」

それだけでも、げんなりして来る彼女の料理の説明。

5人は、一応執事の特徴ポットパイを美味しく食べながら、聞いていた。先にこれを食べた方が良さだろうと言う判断で、猫舌の藤も舌を火傷しながらも、はふはふ言っただけで食べていた。

ポットパイを食べてしまった後で、その後の事を聞いて先にポットパイを食べて良かったと5人は思った。

その理由は．．．。

「でね、その後、私ったら、本当はホワイトソースを入れなきゃいけないかったのに、偶々その時 運悪く家にそのホワイトソースが無くてね。代用品を使ったの。」

「それって何ですか？」

思わず聞いてしまった藤。

「ウフ？ コーンクリームの缶。それもスイートコーンよ。ま、ホワイトソースもコーンクリームもスープにしちゃえば一緒でしょ？ だから、コーンクリームをそのココアで煮たピーマンが入っている鍋の中に入れたのよ。そしたらね、もう臭いが凄いナンのもつて．．．。ピーマンの臭いと、ココアの甘ったるい臭いに、コーンクリームのあのコーン独特の臭いが混ざって．．．。作っているこっちも危ない物を作ってしまったと思ったのよ。でも捨てるの勿体な

いでしょ？」

思わず想像してしまつたら5人と執事さん。瞬時に顔が真っ青になつて来る。

5人とも「先にポットパイを食べていて良かったな。」と思わずぼろつと言。

章依に言つたつては、「お、俺．．．トイレに行きたい。聞いてるだけで吐き気がして来た。あまりにも姫が可哀想になつて来るし．．．。」そう言つて立ち上がるうとした章依の服を東條はムンズと掴んだ。

目で睨むと（お前も聞け！姫だけがあの実験の餌食になつたんだからな！）章依は仕方なさそうに席に着いた。

「だから、パイ生地で器の上から被せてポットパイにしたの。だつて、色も茶色と緑とコーンの黄色が混ざつていて、いかにも毒々しいです！つて言わんばかりだったのよお〜キャハハハハ」

「そ、それで、お母さんは食べられたのですか？」

青い顔をして聞いて来る東は、姫の医療術師として聞いて来る。

「ええ。食べましたよ。思わず吐きそうになりましたが、食べましたよ。お腹が空いていたし。それに早く食べちゃえば、味なんて分からないしね。だから、この子にも食べさせたんです。笑顔で『食べてね』つて」

「げえ、食べたのか。」健次郎も額に手をやると溜息をついていた。

「ええ。私は大丈夫でしたので、クリスマスにも食べさせましたら、あの子つたら二口食べた後で、『ママ．．．ゴメン食べれない。ギブ．．．」

『つて言っちゃつて、全くねえ。しょうがないわね。』って思っていたらその30分後にあの子ったら、『ま．．．ママ．．．お、お腹がいた、痛い．．．』って言った後で倒れちゃったのよ。しかもお腹押さえたまま失神しちゃっていたの。』

（ ）（ ）（そりゃ失神するわ．．．。姫．．．可哀想に、そんな事があれば、ポットパイ見ただけで気絶する筈だな。 ）（ ）（ ）

5人がそう思ったのも無理ありません。クリス君は、白目を剥いて気絶したままだ。

藤は、自分の手のひらを上にと白く出て来た手帳に羽ペンで書き始めた。

「姫の嫌いな物。ピーマンのポットパイ。追加」

羽ペンを手帳に挟んだ藤は、美和子を見ると「他に我々に報告する事はありますか？ガーディアンどの。」そう聞いて来た。

「あ．．．そうね。そう言えば、さっき天上界への扉が開いたって言ったんだけど、あの扉が全開に開くまで後2ヶ月くらいかかるわね。なんせ、あの扉は一気に開くんじゃなくて、勿体ぶった様に少しずつしか開かないからね。だから、クリスはそれまでの間、他の魑魅魍魎達から身を隠さなきゃならないのよ。さっき、神様から2体の魑魅魍魎達がクリスに取り入ろうとしたって言うんだけど、大丈夫なの？」

相変わらず、美和子の頭のネジは二本も三本も抜けているようだ。この人は、天上界に居ても人間界に居ても変わらない、面白い人だな．．．と思いながら苦笑する藤は、そんな肝のすわった彼女だからこそ神様はクリスを彼女達の元へ授けたのだろう。

いつかは世界を滅ぼすかも知れない人間達が、魑魅魍魎と一緒になつてクリス．．．姫の力を奪わんとする前に、姫に一人の人間として、家族と言う愛情を与え貰える場を作ったのだらう。

「それにしても、どうして王子様達が、クリスの遊び仲間だったの？ 私はそれを知りたいわ。それには、マリアも同じ思いよ。」

「そう言えば、あの墮天使マリアは、どうしたのですか？」
東條が眉間に皺を寄せて聞いて来る。

忌々しい墮天使！ マリアのお陰で俺達まで地上に居りて来なきや行けなくなつたんだ。

「家に居ますよ。」

そんな美和子の言葉に驚いていた東條達は、「あの悪戯好きの天才が普通の人間界の家で、大人しく居る分けない。」そう口々に言っていた。

俺もその意見には賛成だ！

何しろ俺はあのルシエファーに産まれる前から迷惑をかけられっぱなしなんだからな！

「大丈夫ですよ。家から一步も出る事は出来ませんから。」

美和子はニツコリと微笑んで言つて来る。余程自信があるのだろう。一体その自信は何処から来るんだ？

そう思っていた俺達6人は、次の母さんの言葉で腰を抜かした。

「神様からと2人でお留守番です。ね、あなた？」

「は？」

あの・・・この親子って、本当に怖い物知らずだ。あの神様に留
守番を頼む親なんて居ないぞ普通！

5人は、この怖い物知らずの山口夫婦を見て溜息をついた。

記憶の扉〜畏怖の味？（後書き）

これ、本当に一度作りました・・・。
味？色？

一気に白雪姫の継母の気分ですね。

話が長い時は、一日一話で更新させて頂きます〜

m
———
m

天上界タクウール 母なる樹木

このまま話が終わるかと思っていたら、話はクリスが産まれた時の話をして来た。

一体、何故この夫婦の話は色々な所に飛ぶのだ？
首を傾げる藤に東條は、まあまあと肩を叩いた。

「もう、13年前になるのね。」

クリスの長い金茶色の髪をそつと撫でる母親の美和子。
クスツと笑いながらも美和子は、話を続けた。

「あの時は、ヤバかったんだから。大体ケビンおじいさまがクリスを産むならイギリスで！何て言うから、あんな事が起きるのよ！」

ブルブルと拳を震わせながら思い出している。
失神していたクリスが漸く目を覚ますと、大きく欠伸をした。その時を狙って健次郎はポットパイをスプーンで掻き混ぜるとすくってクリスの口の中へ入れた。
涙目になってクリスの隣に座っている健次郎先輩を見ていた。

「美味しかったか？」

キラキラと光る健次郎先輩の瞳。やっぱり、俺って健次郎先輩の事が好きだ。

コクリと頷くクリスに健次郎は、クリスの頭を撫でるとクリスの髪にそつと口付けをした。

「好き嫌いは止めような。クリス。」

クリス自身、それが一体どんな意味を持つのか知らない。キョトンとした顔で健次郎の事を見ると健次郎は後からスリッパで章依に頭を叩かれていた。

パコーン！

なんていい音がするんだろうか。

思わず思ってしまった。

健次郎先輩の後で藤先輩、東條先輩、東先輩そして河合からも、同じ事をされた。

俺の金茶色の髪を手で梳かすとその髪に、口付ける。俺の髪は、別に飴でも無いんだぞ！

クリスの母さんは、クリスが産まれた時の事を話してくれた。

俺達5人はそれぞれ天上界の天上人であるから、人間達のように母親の母体から産まれて来る訳ではない。

そりゃ、俺達にも両親はいる。だが、彼らが俺達を作ったのではなくて、タクウールが俺達を作ったのだ。

詳しく説明すると、天上界で新しく命が芽生える為には、天上界の中心とも言えるタクウールに來なければならぬ。このタクウールには、母なる樹木と呼ばれる樹がある。その樹は、樹齡何億年とも言われている。

幹も太く人が1000人以上手を繋いで漸く幹を抱き締める事が出来ると言う感じになる。

俺達は、この「母なる樹木」から産まれた。

葉が生い茂るこの樹木に夫婦となる2人が、お互いの手を重ね、この樹木に触れれば葉が落ちて来る。その葉が地面に辿り着いた時に、2才子供の形となるのだ。

ただ、この時に重要なのは、この母なる樹木に自分達の結婚や親と

しての技量を認めてもらえるかどうかなのだ。

この母なる樹木は、その昔 神様がその御手でご自分の体の一部を引き剥がし、この天上界タクウールに植えられたと歴史の授業で習った。

その神様の御子が、やって来る時は地上が荒れ果てる時だと聞いている。

地上では、私利私欲に溺れた哀れな人間達が、罪の無い者達を殺し、魑魅魍魎と一緒にあってこの地上をどす黒い悪で埋め尽くさんとはかりに活躍していた。

コイツらは、人間がどれだけ欲深いのかと言う事を良く知っている。心の隅に燻っている黒い感情に、そつと魑魅魍魎のタネを植えておくだけで、後は勝手に人間達が育ててくれる。自分達の身が精神が食われて行くのも知らずに、ただ無心になって欲を求めて行く。

神様は、いずれこの悪霊や魑魅魍魎達が天上界にまで、襲って来る事を懸念していた。

そんな時にクリスがこのタクウールから産まれたのだ。

中には、地上人達のような肉体関係を持つてから来る者達もいる。

此処での掟は、生まれでた命は、神から授かりし物。決してその子供達の命を奪う事は、天上界から追い出される事になる。

眉間に皺を寄せた、東條先輩はクリスの母親であるイールメイクト宰相夫人を見ていた。

クリスの母親と臍の緒（前書き）

多少グロテスクな所があります。スルーされたい方は、スルーして下さい。

クリスの母親と臍の緒

「クリスが、人間界で産まれた時に何かハプニングでもあったのですか？」

東先輩が、秀麗な眉を顰めながら聞いて来た。

イルメークト宰相夫人「クリスの母親は、ニッコリ微笑むと「聞きたい？」そう聞いて来た。

彼女の話に寄ると、イギリスでクリスを産む事になったのは良かったのだが、その日は運悪く24年に一回に見れると言われる美しい満月の夜だった。

月と出産は、いつも重なる。特に満月になると妊婦の出産率が高まるのは、月と地球の引力が齎す神秘の力だと言われている。海底にある珊瑚礁が産卵する時も、綺麗な満月の夜にだけだ。

クリスが産まれた夜も綺麗な満月の夜で、しかも、ラブバトリー家は、何故かイギリスの片田舎にある古城が実家となっている。

この古城は、天上界と人間界を結ぶ役割を担っている。先祖代々、ラブバトリー家は、この古城を守って来た。

ここは、人間界で言う元公爵家の血筋でもある。

ラブバトリー家の一人娘である美和子さんは、平民天使出身のケインとの大恋愛の末に結婚した。ケビン爺さんとしては、他の爵位を持った男との結婚を望んだのだが、美和子さんは「ケインとの結婚を認めて下さらなければ、爵位も家も継ぎません！下界に下ります！」と言う愛娘の言葉。

それに折れたのがケビン爺さん。

爺さんは、神様に娘の事を相談して下界に下りて一体彼らがどれだけの事をやれるのかを見てみたいと言いだしたのだ、それで下界ではラブバトリーの名ではなくて山口と言う名で2人の根性を試させてもらったと言うらしい。

ケビン爺さんの心配を他所に、俺の母さんとパパは予想以上に仲良く睦まじくやって行き、パパは人間界でも平社員だけど、皆の癒しとなる人だった。

それを知ったケビン爺さんは、神様に2人に子を授けて欲しいと頼んだ。

丁度その時にあのルシェファー．．．じゃなくて墮天使マリアが、新しく産まれる御子の魂を奪って遊んでいたのだった。

神様は、考えた挙げ句もしかしたら、この墮天使と御子の2人をあの夫婦なら分け隔てなく育てられるのかも知れないと思い御子を先に美和子の胎に宿した。

墮天使の方は嫌がり、美和子の胎に入る事を拒んだので、美和子達が住む古城ラブバトリー城の前に捨て子として籠の中に赤子の墮天使マリアを入れて、神様は立ち去ったのだ。

籠の中にあつたのは、鏡、それは天上界の神様と更新出来る唯一の物。

それを見た美和子は、ニッコリ赤子に微笑むと「今日からあなたは私の娘よ。」と言った。

母さんの話に寄ると、母さんとしては日本でクリスマスを生みだかつたが、ケビン爺さんが、やはり伝説の通りに古城があるイギリスで生めと言う一言で、産み月チヨイ前にイギリスに渡って、色々細々した事をしていたと言っていた。

クリスが産まれる数時間前にいきなり月食となり、イギリスの片田舎の街では、原因不明の停電とイギリス特有の濃い濃霧が発生した。これにより、母さんは古城でクリスを出産するしか手が無かった。

古城には、常勤で医師と看護師が控えており、古城だけなら自家発電で電気が使えたと言う事もあって、停電で満足に治療も受けられない病院へ向うよりも、やはり仕来りに習って古城で出産と言うのがケビン爺さんの言い方だった。

難産であったが、無事男の子が生まれ、母さんはもう二度とこんな

痛い思いはしたくないと心にそう決めたそうだ。

その時に、たまたま母さんに付き添っていた看護師は、中国系アメリカ人だった。

彼女の名は、ジユディー。

このジユディーが、「ワタシ。色々な国で、医療のお仕事してきたよ。色々な国には、仕来りあるね。日本は、どんなのある？」少し舌足らずな言い方をするが、彼女の笑顔は周りをほっとさせるそんな笑顔だった。

「日本には産まれて来た子と母親を繋いでいた証として臍の緒を取っておくんですよ。ほら、ここ．．．」にある長さ2？くらいの物と言おうとしたのに、ジユディーは最後まで聞かず、思い立ったが吉日と言わんばかりに風のように美和子達がいた部屋から出ると何処かへ行ってしまった。

日本の仕来り．．．そう聞いたクリスの母親は、手をポンと叩くと、臍の緒の事を彼女に話した。これが、まさかあんな事になるうとは．．．。

暫く考えたジユディーは、「ガッテンショウチ！」と変なカタカナ日本語を使って治療室へと向った。

クリスの母親美和子は、夫であるケインに「私、嫌な予感がするんだけど．．．」と言っていた。

その予感は的中。

何と、1ガロン用のジップロックバッグにフランクフルトの様な長い臍の緒をグルグルにして生のまま入れて持って来たのだ。

グロテスクな生物を見た美和子は、それ以来フランクフルトや、ソーセージと言った物を見ただけで、その事を思い出してしまうほど、脳裏に焼き付いたのだった。

「あ、あの〜イールメーカート宰相夫人？それって、クリスとは何の

関係もないでしょう。その話は、あなたとその勘違い看護師である
ジヨディーの意思疎通が上手く行かなかったって言う話でしょう。」
額に手を当てながら東は美和子にそう言うと、美和子は「いいえ。
これには続きがあるのよ。」そう言って来た。

その後、美和子達はその生のへその緒をどうするかで悩んだ挙げ句、
納屋にある冷凍庫にしまっておいたそうだ。
それから、二年後、使用人がその冷凍庫を欲しがったので、中身を
確認せずにそれを渡したと言っていた。

「え？もしかして、食べちゃったのですか、その人？」

端切れが悪い・・・「ええ。多分。随分とビールを飲むダンナさん
がいらしたから。おつまみとして・・・。」それを聞いた5人はす
ぐに席を立ち上がると、急いで我先にとトイレへと駆け込んだ。

クリスの母親と臍の緒（後書き）

臍の緒の話は実話です。

本当に食べられちゃったのかは、私は知りません。でも、ジップロツクはないでしょう。

クリスの母親恐るべし

母さんは、そんな5人の後ろ姿を見て、「王子様達は本当に大きくなられて、本当に良かったわね あなた。」ニッコリ微笑むと夫であるケインを見て言った。

自分達の横でかなりのショックを受けているクリスに、ニコニコと笑いながら聞いて来た。

「クリス。あなたさつき王子様達から髪にキスされていたけど、あれってどんな意味があるのか知っているの？」

髪に口付け．．．これは天上界での正式なプロポーズのやり方なのだ、後で母さんに聞いて俺は5人にプロポーズされたのだと言う事をしり、倒れてしまったクリスであった。

クリスが、「お、オレ、一人には絞れない．．．。」そう言い出すと母親は首を横に振った。

「大丈夫よ。天上界は多夫一妻なのよ。この意味分かる？」

天上界では、一夫多妻ではなく、多夫一妻なのだ。

イールメークト宰相夫人がケインだけを生涯ただ一人の夫として迎えているのは、本当に不思議な事である。それほど、夫であるケインを愛して止まないのであろう。

「でも、母さんはパパしかダンナはいないだろ？」

「ええ。だって、私、ケインを愛してるんだもん。」

年頃の子供の目の前でキツく抱擁をして、ドラマのようなキスシー

ンをしている両親達。
多夫一妻……

「多夫一妻!? 何で!??!」

そう叫んだクリスは、母親の顔を見ると赤い顔をして口をパクパクさせていた。

母親の話に寄ると天上界には男が沢山居過ぎて、女は少ししかない。

そこで出されたのが多夫一妻制と言う訳だ。

一体どれだけ少ないかと言うと男が2000人いるとしよう、その男の数を基準とすると女の数は200も居ないのだ。

天上界では、女性が育ちにくく、産まれた時にはとても可愛がられる。

男として産まれた時は、将来結婚するであろう妻の為に何でも出来る様にと家事一切を全て幼い頃から叩き込まれるのだと言っていた。それを聞いたクリスは、自分の母親が実験料理しか出来ない理由が漸く分かった。

クリスが、ガヤガヤと五月蠅い廊下の方に目をやると、トイレから戻って来た先輩達の顔を見て、リンゴの様に頬を染めた。

髪にキス!!プロポーズだと知り、その上 天上界は多夫一妻制だと言う事も分かり、クリスの頭の中はパニックに陥った。

「お、オレ誰かと……け、け、け、結婚するのかよ……。」

母美和子は、嬉しそうに頷く。

「そうよ。この5人の王子様達とね。そう考えるとマリアも凄い事をしてくれたものだわね。ウフフ。」

その後は、クリスが小さい頃に風邪を引いた時に飲ませた野菜フルーツジュースの話になった。

これも、色はまるで池の水（汚い方ね）それを一気に飲みしると言われ、飲んだ事もあった。

その時ですか？

熱はぶり返すわ、全身鳥肌じゃなくてジーンマシンが出るわで散々な目にあつたのだった。

それ以来、食事はなるべく自分で作る事にした。その方が安全だし美味しい。そんな話をしてると5人は、クリスの顔を見て「姫は、物凄い苦勞をされたんですね。」そう言つて来た。

オイ。同情するな。

オレがもつと惨めに感じるだろ。

そんな事を考えていたら、母親の美和子はポンと手を合わせて音を鳴らすと浮かれた少女のような表情で嬉しそうにオレの暴露話を始めた。

「クリスつたらね。納豆が嫌いなの。何でも、クリスが言うには『あの臭い臭いつて、二週間履き替えてない靴下のような臭いがするんじゃない。食える分けないだろ？』ですって。」

それを聞いていた5人は、嫌な予感がして来た。まさか、この人つてば姫に嫌いな納豆を食べさせたんじゃないのか・・・と言つ恐ろしい想像。

クリスの母親恐るべし(後書き)

次回は、納豆編です。

クリスの母親恐るべし〜納豆編

そんな事を考えていたら、母親の美和子はポンと手を合わせて音を鳴らすと浮かれた少女のような表情で嬉しそうにオレの暴露話を始めた。

「クリスったらね。納豆が嫌いなの。何でも、クリスが言うには『あの臭い臭いつて、二週間履き替えてない靴下のような臭いがするんじゃない。食える分けないだろ?』ですって」

それを聞いていた5人は、嫌な予感がして来た。まさか、この人っ
てば姫に嫌いな納豆を食べさせたんじゃないのか・・・と言う恐ろしい想像をしていた。

藤は、ピクピクと眉間に皺を寄せながらも、クリスの母親である美和子に訪ねた。

「では、イールメークト夫人は、姫にどうされたのですか?」

美和子曰く。

何種類もの納豆料理を作って二日間に渡る納豆フルコースオンパレード。

前菜は、納豆のとネギの刻み零細と豆腐に始まり、納豆汁、納豆とツナのワサビ醤油和え、納豆チャーハン、納豆揚げ餃子、デザートは甘納豆。聞いているこっちが胸くそ悪くなって来る。

イールメークト宰相夫人曰く

「幾ら、納豆が嫌いと言っても一つか二つくらいなら調理法を変えただけで食べれる料理がある筈なのよ。私って、そう言うのに燃え

るタイプなのよね」

茶目っ気たっぷりで言って来るイールメークト宰相夫人が、怖い。イールメークト宰相夫人は、ムスツとしているクリスの頭を優しくナデナデしていると、お土産よ。そう言っつて、甘納豆を出して来た。それを見たクリスは、口に手を当てると今にも吐きそうにしていた。

そんなクリスに、イールメークト宰相夫人は「これじゃなかったら、クリスが好きな納豆アイスや納豆ヨーグルトもあるわよ。栄養たっぷりで、健康に良いんだから？」そう言っつとにっこりと微笑んだ。クリスですか．．．？

これで、二度目の失神をしています。

東達は「納豆アイス．．．いくらオレでも其処まで想像した事無いです。」

「それを食べさせたイールメークト宰相夫人も凄いけど、食べさせられた姫も。ある意味凄いやな」

5人は顔を青ざめながら目で話していた。

納豆アイス．．．まさかバニラ味のアイスに納豆をそのまま乗せたなんて無いよな．．．。

そんな事を考えていたら、イールメークト宰相夫人が、納豆アイスの説明を俺達5人にくれた。

それを聞いた俺達5人は競い合う様にトイレへと駆け込んで行ったのだった。

成る程．．．それでこの間、クラスの内藤の名前を大声で呼んでたら、クリスのヤツ顔が真っ青になったのか。

この人は、限度と言う物を知らないのだろうか．．．？そんな事を考えていた藤は、また両手のひらを本のように開くと手の上にノートが現れた。

「 姫の嫌いな物 納豆 追加 」

しかし、その納豆には秘話があった。

前菜からデザートまで、全てを納豆づくしにしてクリスマスに食べさせようとした為に、クリスマスは今でもスーパ―に立ち寄ると納豆コーナ―だけは近寄る事も見る事も出来ないのだ。余程、辛かったに違いない。単に好き嫌いを直すのではなく、これは殆ど拷問に近いですな．．．。

5人は目でそんな事を話していた。

母親の暴露話はこれで終わる事は無かった。

イギリスでの初めてのお買い物事件を話し出した。

「クリスマス．．．。あなた王子様達にあの事を話しておいたの？ あ

なたがCMを見ただけで泡吹きそうになるアレよアレ」

執事の羊さんから、紅茶を貰って飲むとしたクリスマスは、母親美和子の言葉に驚き、思わず舌を火傷してしまった。

「アチ！」

涙眼でクリスマスは、母親の美和子を見るが、美和子はただ、クスツと笑ってこっちを見ているだけだった。

クリスの母親恐るべし〜納豆編（後書き）

次は、アリスの悪戯編です。

マリアの悪戯

山口家には、クリスとマリアと言う2人の子供達がいる。

しかし、2人は血は繋がっていない。

クリスが言うには、彼がまだ幼稚園生だった頃、自分の城の前に籠が置いてあって、その籠の事を母親の美和子に伝えた事が、そもそも始まりだったらしい。

今でもクリスは事あるごとに、「あの時に、あんな物を拾わなければ良かった。」と呟いている。

あんな物……

それは、勿論マリアの事である。

マリアは、物凄く悪戯好きである。

いつもマリアの悪戯の被害者になるのは、マリアであった。

あれは、クリスが小学校4年の時、家族でスーパーに買物に行ったのだ。

その時にクリスは、自分専用の歯磨き粉を買った事になっていたのだが、中々これが見つからない。ようやく見つけた歯磨き粉は、可愛いピンクの箱に入れられていました。

それをカートの中から見ていたマリアは、目をキラッと輝かせると、「お兄ちゃん！これの方が、安いよ」そう言って、クリスに渡した物と交換したのです。まあ、それも同じピンク色の物でしたが、歯磨き粉ではありませんでした。

その買物から二週間後。

ルルン気分、ハミガキをし始めるクリスは、朝から災難に遭うのでした。

歯ブラシの上に出したドピンクの新しい歯磨き粉。

だが、そんな変な色にも全く何も疑うと言う事も知らず、「あ！あの商品の新製品なんだ？」と嬉しそうにしていました。彼がいつも使っている歯磨き粉の色は、禍々しいシヨッキングピンク色の物が出て来ますので、そんな風に思われたのでしょうか。クリスがマリアの悪戯の元を口に入れた瞬間。．．．物凄いゴムの苦い味と臭いが口の中いっぱいに漂って来た。そう、マリアがクリスに渡した物は、入れ歯用接着剤のポントだったのです。それ以来、そのCMをテレビで見る度に、あの事を思い出して口から泡を出して倒れてしまうクリスでした。

マリアの悪戯（後書き）

これは、？のようですが・・・。
確かに間違えて買ったのは事実です。

マリアの悪戯その？

悪戯好きのマリアは、クリスがカレーを食べるときは、必ずアイスティーを飲む事を知っている。

そして、そのアイスティーは、母親美和子がいつも作り置きをして、ピッチャーに入れている事も。何の変哲もない平和な毎日に飽き飽きしているマリアにルシェファー降臨。

クリスが食べるカレーにだけ、タバスコを何滴か振りかけた。

しめしめ．．．これで、クリスはアイスティーを絶対飲まないといけなくなるのよ。

フフフ．．．と不気味に笑うマリア。

そんな事とは露知らず、クリスは東條先輩達と車でナンパしまくっていた。

クリスだけを駅前に立たせておけば、まるで誘蛾灯に蛾が寄って来る様に女子高生から大学生までよってくるのだ。お持ち帰りは流石にクリス自身お断りをしているが、そんな事をされそうになると、健次郎先輩がやって来てクリスを助けてくれる。

男同士のたわいもない遊びが終わると、クリスはルシェファーが待つ家へと帰って行ったのだ。

玄関の戸を開けると直ぐにカレーの香りがして来る。

「うひょ〜！今日はラッキーだ？ カレーかあ〜」

そう言うところクリスは二階の自分の部屋で制服を脱いでいた。何度か光がこっちに向って来たような気がするが．．．。上半身裸で部屋にあるクローゼットを覗んだクリスはゆっくり近づくと、思い切りクローゼットのドアを開けた。

其処には、マリアがデジカメを持って隠れていたのだった。

「あーあ。見つかったやつ。これで商売が出来なくなるじゃない。」

「小学生のくせに、お前は一体何を考えているんだ！」

クリスが怒ってマリアの手からデジカメを取り上げると、盗み撮りされてた画像をチェックしていた。

「マ〜リ〜ア〜！何でオレの着替えとか、寝ている画像まで入っているんだ！ 言えよ！誰にこれを売ろうとしていたんだ！？」

「東先輩達。」

「はあ？」

デジカメの画像を全て消したクリスは、マリアに向って「携帯だせ！」と言って来た。

渋々携帯を出すマリアの手には、iPhoneがあつた。

おい！何処の世界に小学生のガキンチョにこんなカメラ機能の携帯を渡すヤツが居るんだよ！

心の中で罵っているクリスは、マリアにこんな携帯を買い渡した人が誰か大体分かっていた。

「東先輩だろ。。。。」

「ぴんぽーん」

はあ〜と溜息をつくつと、携帯を握り潰したい気持ちで一杯だったクリスだが、明日は東條先輩の頼みでテニスの試合に出る事になっている。こんな事で手を怪我して、東條先輩との約束を破る訳にも行かず、クリスは携帯を持って風呂場へ直行した。

自分の携帯を持って行かれた事に腹を立てたマリアは、必死で携帯を取り戻そうと追いかけて来る。

「折角のお小遣い稼ぎが出来なくなるじゃないの！」

「小学生は、小学生らしくして置けば良いんだ！つたく何が悲しく

てお前の小遣いの為にオレが身売りしなきゃなんねーんだよ!」

パツとクリスは手から携帯を離すと、携帯は真直ぐに風呂の湯の中に沈んで行った。

フフンと鼻で笑ったクリスはすぐに部屋に戻ると、シャツにサーフパンツと言うラフな格好で階下に下りて来た。

「母さん、腹減った。何か手伝う事ある?」

母さんに料理を任せたら恐ろしい事になるのは、身にしみて分かっているクリスは、必ず最後は自分で味付けをする事にしている。

母親の味覚センスは、超が付く程オカシイからだ。

まさかカレーを変な風に味付けするヤツなど居ないだろう。．．．そんな事を思っていたら、マリアが変な笑いをしている。

こ、コイツ．．．俺の野生の勘が言ってる。絶対マリアが何かやったと。

オレは、自分の席の前に置かれているカレーを凝視するかのように見つめていた。

おかしい．．．所々に、赤い汁みたいな物がかかっている．．．

クリスは、チラリとマリアの部屋のドアが半開きになっているのを見た。そこから何かキラキラと光っている。それを見たクリスは「おい。マリア鏡が呼んでるぞ。」そう言つとマリアは仕方無く席を離れた。

その隙をついて、クリスは自分のカレーの皿とマリアの分を交換した。だが、これってもしかするとマリアの策略かもしれない．．．そう思ったクリスは、ロシアンシャツフルみたいに家族全員のカレー皿と次々に交換した。

はあはあと肩で息をするクリスは、自分の席に着くとカレーをじっと見つめた。

(うん。赤い汁はないな。)
すっかり安心しきったクリスは、「いただきます〜！」と元気に言
うとカレーを一口食べた。

「……………これ、劇マズ！」

急いで、アイステイーが入っているピッチャーを持って来ると、大
きめのカップにアイステイーを注ぐとガブガブ飲み始めた。

「う！このアイステイー、何か味が変わ。」

ピッチャーの中のアイステイーを全て捨てるクリス。そのクリスの
表情が固まったのだった。ついでに側にいた母親の美和子も固まっ
ていた。

「これって、台拭きじゃんか。しかもシンクの上を拭くやつ……………」

これには、母親の美和子も怒っていた。

「マ〜リ〜ア〜！」

カレーが劇マズだったのは、母親が半生のタマネギを入れ過ぎたの
と、マリアが俺の嫌いなチョコを入れた事による合作だった。
それからと言うもの、例えカレーであっても自分で作った方が、マ
シだと気付かされたクリスだった。

マリアの悪戯その？

普通は、歳の離れた妹言うのと、可愛いもんだろうって言われるが、俺に取ってマリアは、悪魔！いやルシエファーとしか言いようが無い！

俺の上半身裸の写真は撮るのは、毎度の事。少しでも俺が家の縁側で寝ていようものなら、藤先輩と東先輩から買ってもらったと言う、メイク一式を使って俺の顔に化粧をしゃがった。

もちろん、俺はそんなの知らなかったから、昼寝の最中に藤先輩達からの呼び出しの電話で、呼び出された。

あの時は悪夢だった。

サマーセーターに、淡いジーンズを着ていた俺は、バスに乗れば痴漢に遭うし、道歩いていれば、男達から次々とナンパされるわけで、散々だった。

表参道のウィンドー映った自分の姿を見て、俺は愕然とした。

「な、何じゃ〜!? こりゃ〜?!」

慌てて、男子トイレに駆け込もうとしたら、誰かに腕を思いつきり引っ張られた。

誰だ? そう思っつて、後を振り返ると以前、女装した俺に絡んで来た高校生達だった。

「あ〜!!! チョーラッキー!!! この間の彼女じゃん? オレ達と一緒に楽しい事しない?」

(俺の機嫌は、最高潮に悪い。そんな時に声をかけて来たのが、運の付きだな。。。)

俺は、不覚にも笑ってしまった。そんな俺の笑顔を見て、勘違いし

たのは目の前のオメデタイ高校生達だった。

プチー！！

これは、俺の堪忍袋が切れた音だった。

物の二分でオメデタイ不良高校生達は、地面とご対面をしている。通りを行く人達は、どうしたんだと俺の事を眺めていたが、俺が大きな声で「監督！今のシーン大丈夫でした？」と大きな声を出したもんだから、野次馬で集まって来た人達は口々に「な〜んだ。撮影か」そう言っていた。

その後藤先輩達との待ち合わせの場所に行ってみれば、河合とぶつかって、俺は河合を押し倒す感じで、倒れた。

その時かな、俺の携帯を落としたのって。。。後でどれだけ探しても見つからなかったから、困ったんだよね。携帯依存症で、手持ち蓋さで落ち着かないって、こう言う事なんだと実感した。

結局、藤先輩と東先輩には、俺にナポレオンパイをホールで2本買わせる事で、許した。

ナポレオンパイは、全て俺の胃袋に収まってくれたが、俺の怒りは未だ収まらない！

残りは、マリアの部屋に行って、隠してある化粧道具やデジカメ、インスタントカメラ、携帯を全て俺の手で処分してやった。

マリアは、夕方近くになって母さんと一緒に買物から帰って来た。そんなマリアを待っていたのは、水没している携帯電話とデジカメ、それからフィルムを取られて使い物にならなくなったインスタントカメラ。化粧道具は、母さんの部屋に置いておいた。しかもパパの名前で！！こうすれば、別に俺に被害が行く事はない！

自分の部屋の惨状を見たマリアは、大きな声を上げて俺に何か言おうとしていたが、いつもの様にピカピカと鏡が光ってんだよね。

だが、マリアも負けては無かった。俺の歯ブラシに俺が大嫌いなシ

ヨウガ汁を着けてやがった！ 思いつきり舌が腫れて、俺は夜もろくに眠れなかつたんだ。

あんな事をするのが、天使だって？

は！呆れて物が言えねーよ。

あれは、天使なんかじゃねーよ。

堕天使だ！

しかも、黒い翼で赤い角を生やしたルシェファーだ！

そういや多夫一妻制

そういや、母さんが言っていたな…。天上界は多夫一妻制だって俺は、この場合どうなるのでしょうか…。
テーブルを挟んで俺の顔をニコニコと微笑みながら見ているのは、俺の母さん。

「で、クリス。あんたは、王子様達にお返事はしたの？」

「は？」

俺は、目の前に出されていた煎餅をボリボリ音を立てて食べていた。執事さんに日本茶を出してもらつと、もう一枚の煎餅に手をのばした。

「何のだよ」

母さんは、クリスの手から煎餅を取り上げると、じっとクリスの顔を見ていた。

潤んで来る母さんの瞳を見たクリスは、目を逸らすとテーブルに突っ伏した。

(マジかよ)。母さん、その目は反則だよ。クリスは、小さい頃から母親のウルウルしている瞳に弱いのだ。このウルウル攻撃で、何度野暮用を押し付けられた事か…。)

「もちろん、プロポーズのに決まってんでしょ！」

(やっぱり、そう来たか。クリスは、助けを求める様にパパの方を

見てみたが、パパは諦めると言わんばかりにクリスの髪を優しく撫でて来る)

「俺、そんなん知らねーし。それに、俺男だしー」

クリスは、執事さんに言ってカフェオレを注いでもらった。まだ熱いカップの中に淀んでいる優しいベージュ色の液体に、息を吹きかけた。俺は、元来熱い物は苦手だ。ラーメンもそうだし、シチュウもスープもご飯もそうだ。

だが、アイスクリームを食べる時にも、つい息を吹きかけている自分がいる。

そんな自分に思わず(何やってんだ俺?)って突っ込みたくなる。思わず現実逃避をしていた俺は、母さんの悪魔の微笑みの下に隠されていた計画を見破る事など出来なかった。

「ふふふ」。そう言うと思ってね。この指輪は預からせてもらうわ」

母さんは、自慢げに俺のピアスが入っていた箱を取り出すと、其処に入っていた黒い指輪を確認した。

俺は飲んでいた温いカフェオレをブツと吹くし、あまりの衝撃にテーブルに残りのカフェオレを零してしまい、俺の着ていた服は、カフェオレまみれとなった。

「さ、クリス様。こちらに来て下さい。お着替えも全て用意してありますから。バスルームはこちらになります」

そう言って執事さんが俺をバスルームに案内してくれた。

俺の家は、純和風の家だけど、此処は最新式の洋風バスだな。

カフェオレで汚れた服を脱ぐと、俺はすぐにシャワーを浴び始めた。

シャワーを浴びている時に、俺ってもしかして母さんの計画に嵌っていないか？って思ってた。

一応実の親なんだし、疑ったら可哀想だ。俺は仏心でそう思ってた。

しかし、このバスタブには、薔薇の花弁が浮かべてあるんだ。何かご機嫌になって来る？

石鹼は、ラベンダーだし、今までカリカリと怒って来たのが？みたいに引いて行く。

ん？何となく誰かに覗かれているような気がしてならないクリスは、バスタブから出るとバスルームのドアを思いつき開けた。

其処に居たのは、何と可愛い子猫だった。しかも2匹。

あまりの可愛さにクリスは子猫達を抱き締めるとお湯で子猫達の身体を念入りに優しく洗った。

2匹の子猫達は、黒いベルベットののような艶を持ったのと、後一匹は白いけお腹と首、足以外は、虎縞がある猫だった。

クリスは、2匹の猫を見ると、「何か、健次郎先輩と、河合みいだな」そう呟いた。

俺の言葉に、2匹の子猫達はピクンと身体を強ばらせた。

クリスと猫達

風呂からさっぱりした顔で上がって来たクリスは、自分の足元に纏わり付く様に擦り寄って来る子猫達を抱き寄せると、タオルで子猫達の体を拭いていた。

クリスが長い金茶毛の髪をドライヤーで乾かしていると、さっきまで自分の足元で、擦り寄って来ていた猫達は、何処かへ行ってしまった。

「猫ちゃん〜」

何度も呼びながら、居間に戻って来たクリスは、居間から出ようとしていた藤先輩に、抱きしめられるようにして風呂場へと連行されて行った。

「クリス。こっちに来るんだ!」

「な、何だよ〜! 藤先輩!」

脱衣所の鏡に写った自分の姿を見せつけられて、クリスは気が付いたように、両手でクロスする様にして胸を隠すと、しゃがみこんだ。藤先輩は、爽やか王子スマイルで、クリスにシャツを頭にかけてやると、少し乱暴に頭をシャツの上から撫でると、脱衣所から出て行った。

藤は、脱衣所の戸を閉めるとクスツと笑った。

「役得と、言っちゃ〜 役得だったがね。あーあも、無防備で居られる……………」

今更、あのクリスに女らしくしると言っても無理な事は十分分かって居るが、もう少し自分が女だって事を自覚してもらわないとな……。

自分だったから、他の奴らに何があつたのか、（特に東や、章依だつたらどうなつていた事やら……）分からない様にすることができたが、次はこんな事が無い様に注意させないといけない……。

……そういや、章依と東がさつきから見当たらなかつたが、一体どこへ行つたんだろうか？ そう思っていた。

クリスは、真つ赤な顔で自分の姿を鏡で見っていた。

幾ら、元は女だつたとしても、この13年間ずっと男として育てられて来たのだ。今更、急に女らしくしろと言われても無理な事が沢山ある。

特に風呂上がりは、注意がさらに必要となる事が良く分かつた。ついクリスは、いつもの様に風呂上がりには、必ずホットココアを飲むのが日課となっている。そのために、此処は 健次郎先輩の家だと言つ事をスツカリわすれていたのである。クリスは下半身にタオルを巻くと、上半身裸で堂々と居間に行こうとしていたのだ。

居間には、真つ赤な顔をした章依と少し二へラ顔でコーヒーを啜っていた東がいた。

藤は、彼等を見つけると、人差し指でクイクイと彼等にこつちに来る様ジェスチャーすると、渋々顔で2人は、藤と東條が仁王立ちして待っている章依の部屋へと行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3590v/>

山口さんちのクリス君

2011年10月12日08時59分発行